

ごめんください、
足尾のここと
教えてください、
その

〜商店・映画館・芸者のこと〜



3

ごめんください、足尾のこと教えてください！その3
く商店・映画館・芸者のことく

はじめに

この冊子は、平成25年度から足尾で活動する地域おこし協力隊が行っている、生活史聞き取り集の続編です。生活史の聞き取りは、日本でも有数の足尾銅山について、ここで生きてきた人々に語っていただき、資料や文献等では知ることができない生活や体験等の記憶を、貴重な地域資源として残していくという趣旨のもと始まりました。前任の地域おこし協力隊が作成した、「ごめんください、足尾のこと教えてください！」その1・その2では、公害や坑内での仕事、閉山等について、地域住民が様々な切り口で語っています。

そして、3冊目となる今回は、足尾の鉱山町の様子について、かつて、足尾の中で最も賑わいをみせた繁華街の商店の方々に聞き取りを行いました。また、1940(昭和15)年頃に、その繁華街で営業していた商店を示したマップを載せています。なぜ、その頃なのかというと、その年代が、実際に当時を生きた人たちから、話を聞くことができるギリギリの年代だったからです。

昔と比べると、商店の数は少なくなりましたが、賑わいがあった頃の様子を伺うと、その頃、足尾銅山が、どれだけ栄えていたかがわかります。また、繁華街には、今でも、映画館の跡地であったり、芸者屋に入るための路地などが残っています。今でこそ閑散としているように見える町の景色ですが、確かに、そこには最盛期、38,000人の人口を抱え、日本一の産銅量を誇った足尾銅山の面影がありました。

はじめに

目次

足尾町地図

第1章 鉾山町の生活	1
町部の暮らし・社宅の暮らし	6
第2章 常盤通り	9
「宿」一番の繁華街 松原常盤通り〔高久古物屋〕	13
「酒1杯に肴付き」が売り文句〔若竹食堂〕	15
人情のつながり 幸町で80年〔壁長屋〕	17
足尾町の食文化の高さに誇り〔関塚家〕	24
町の全盛期に少年時代〔城崎座〕	27
いろは座・金田座・足尾キネマ〔戦前の映画〕	30
夢も恋も生まれた映画を映して〔戦後の映画〕	33
足尾名物「からす団子」、〔からす屋〕	37
月1回のご馳走 植佐寿司〔植佐食堂〕	40
昔ながらの方法で和菓子作り〔青柳菓子店〕	42
第3章 昭和通り	43
昭和通りの風景〔ニッ木〕	47
桐生から足尾に嫁いで〔大野書店〕	49
商人の娘と坑夫の奥さん〔安塚菓子店〕	53
第4章 赤沢の花町	55
往時の花町の賑わい〔北京軒〕	59
子どもの目に映った花町〔お茶屋〕	64
注釈	72
参考文献	76
おわりに	78

第1章 鉾山町の生活



足尾町納涼祭の様子

鉾山町を分ける壁

有望な鉾山があると、その麓には鉾山町が形成されます。そして鉾山の主役と言えば、鉾山で働く鉾員ですが、鉾山町を形成していたのは、何も鉾員だけではありませんでした。

長屋の名前

上の写真は昔の通洞地区を写したものです。下の写真は、今の通洞地区の様子です。

昔の通洞地区の様子

現在は、1996(平成8)年から始まった住環境整備事業によって住宅が立ち並び、昔の面影はなくなっています。

上の写真で、手前側にある平屋の建物は、棟割り長屋と呼ばれ1つの長屋に5世帯程が暮ら



新井雄雄撮影・栃木県立文書館所蔵

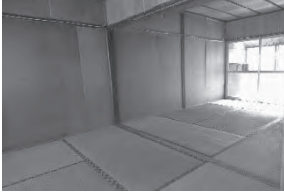


今の通洞地区の様子

していました。1部屋は、6畳くらいの広さ。そして、隣の部屋との境は板1枚で、会話も丸聞こえだったようです。また、各部屋に天井板がない長屋もありました。天井板がないということは、隣の部屋との境になっている板から顔を出せば、向こう側が覗



(上)福長屋と呼ばれていた南橋地区
(中)長屋付近の様子
(下)長屋の中



けたということでした。このような長屋が、各地区にありました。それぞれの地区の長屋には名前が付いており、福長屋・赤長屋・川向長屋かわむらやというような名称で呼ばれていました。諸説ありますが、福長屋は銅を吹く(鋳石を溶解して銅を取り出すこと)の

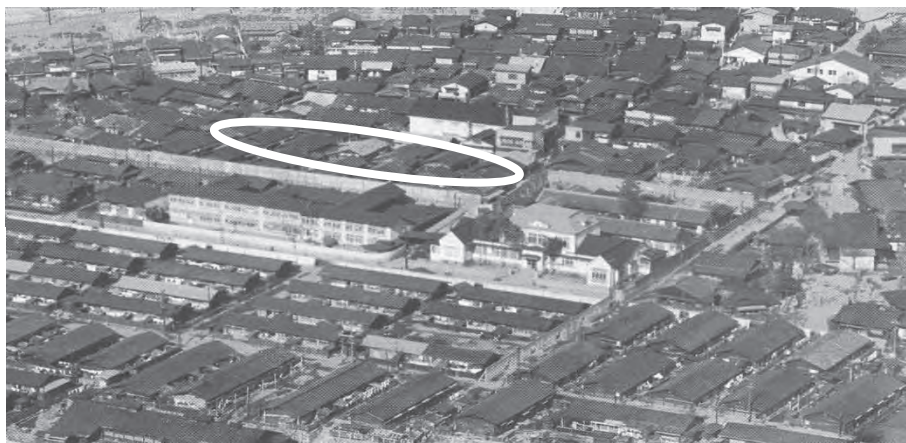
「吹く」が「福」に、赤長屋は、銅の^{注1}露頭の影響で周囲の崖や川が赤く見えることから、川向長屋はその名の通り川の向こう側

にあっただからだと言われている。す。

前のページの写真の長屋は、その地区名を頭につけて通洞長屋と呼ばれていました。この、通洞長屋の近くには、壁長屋と呼ばれている場所があります。壁長屋の「壁」の由来は何なのでしようか。



足尾町商業案内便覧図(1916年発行)から抜粋



長屋のすぐ近くに壁があることがわかる

壁の意味

上の写真は通洞地区と、隣の松原地区の町並みを写したものです。そして、写真で丸く囲んであるのが、壁長屋が建っている辺りです。長屋の近くに、左から中央にかけて、まっすぐに壁が続いているのがわかります。それは、途中で切れて、またその後ろから壁が続いています。地域住民によると、この壁が、壁長屋と呼ばれていた理由だと言われています。手前側に規則的に並んでいる長屋は、前述の通洞長屋です。

この壁は一部取り払われてい



壁が始まっている場所の現在の様子(銅山観光入口から坂を上った交差点付近)

る箇所もありますが、現在でも見ることができません。壁は波形スレートで、これが200メートル程続いています。

なぜこのような壁が作られたかという点、スレートはセメントが原料になっているため、耐

火性に優れています。つまり、この壁が建設された一番の理由は防火のためだと言われています。火災が起きたときに延焼を防ぐ目的で造られたということです。

しかし、それ以外にも理由があると言う人がいます。それは、区分けです。壁を境にして、住む人が分かれていたということですね。下の写真を見れば、建っている家の区画や形状が、壁を境に全く違うことがわかります。

実際にこの辺りに昔から住んでいる方は、壁の奥側、つまり壁長屋がある方を「町部ちやうぶ」、壁の手前側、通洞長屋がある方を「社宅」と呼んでいたそうです。

「町部」とは個人で家を持つて、商売等をしている人達が住んでいる地域を指し、「社宅」とは、今で言う社員寮のようなもので、銅山で働いている鉱員のために、会社が用意した住居のことを指します。

こういった住み分けは、鉱山町にはよく見られる特徴ですが町部と社宅には、住む場所以外にも様々な違いがあり、お互いの関係性は、鉱山町の様子を知る上でとても重要です。

町部と社宅の関係性については、その両方で生活したことがある方が、聞き取りで語ってくれています。



上空から見ると、家の区画や形状の違いがよくわかる

町部の暮らし・社宅の暮らし

私は、町部で生まれました。うちがお店をやっていたので、高校に入る前からお店を手伝っていました。旦那さんが銅山の鉱員だったので、結婚してから社宅に入りました。

その頃は、買い物するにも社宅と町部でそれぞれの場所がありました。社宅の人は^{注3}三養会で買物をすれば、それで済みましたけど、町部の人は近所の八百屋さんに行きました。お米なんかはやっぱり三養会に行かないと買えなかったもので、町部の人が三養会に行つて買物しようとする^と、ジロジロ見られるような感じはありました。

子どもの頃も同じで、町部から銅山の社宅にはあんまり遊びにも行けませんでした。町の方から、やたらに銅山に行くと、いじめられるとかそういう感じでしたね。「町のもんがあんまり社宅の方に行くな」とかつて、よく言われました。だから、町立の足尾小学校と、会社が作った私立の本山小学

校は、特に仲が悪かったですね。

結局、親たちが、銅山で働いている人と町にいる人で、あんまり仲がしつくりいつてなかったですからね。かたや銅山、かたや町。もうそれで分かれてましたから。ただ、山神祭があったり、盆踊りがあるときは、出店があるから、社宅と町部の関係なく、出ていきました。

社宅の人たちは、長屋が6軒並びぐらいで建っていたので、何かやるときはその人たちが一緒になってやるから、まともりは良かったです。誰か家で具合が悪いなんていうと、近所で看病してくれるし、留守にしている時に雨が降ってきたなんていうと、洗濯物を取り込んでおいてくれましたからね。だから人情味はありましたね。長屋暮らしがいやだつて言つて出て行った人もいましたが、私は足尾つ子で、どこへも出たことはありません。

足尾のメインストリート

決して良好な関係とは言えなかった町部と社宅ですが、商店は鉱員を相手に商売をし、鉱員は稼いだお金の多くを商店に落としていきました。町部と社宅の間には、物理的にも精神的にも壁のようなものがありました。が、お互いに依存し合っている関係性でもありました。

鉱員は「宵越^{よこ}しの金は持たない」という気前の良さで、夜の町部はとても賑やかだったようです。

しかしなぜ、そんな生活が出来たのかというと、社宅では家

賃、水道、電気代などは、全て会社負担。会社の従業員で組織する生活協同組合「三養会」というスーパーでは、ついで買うことができたため、手元にお金がなくてもすぐに生活に支障がでるということはありませんでした。

(ついで買った分は、給料日に

まとめて支払っていた。)

つまり、生活基盤は、全て会社が整えていたため、働くことさえ出来れば、生活に困ることはあまりなかったと言います。

そして、町部の中でも、特に鉱員で賑わった通りには、「常盤通り」、「銀座通り」、「昭和通り」

(上)三養会の店内。食料品や生活雑貨など生活に必要なものは殆ど揃った。
(左)会社が布設した水道管



等の名前が付いていました。

それらの通りは、20世紀初頭には、道の両側に隙間もないほどびっしりと商店が軒を連ねていました。その頃は、足尾鉄道（現在のわたらせ渓谷鐵道）開通による輸送力の増強や、国産第1号となるさく岩機の導入、

不規則な形をした塊状鉱床である^{注4}河鹿鉱床の発見に伴う産銅量の増加等によって、足尾銅山は全盛期を迎えていました。それに応じて、他県からの出稼人や行商人等で、町部も発展していきました。



(上)第一松木川橋梁を走る貨物列車

(下)大正期のさく岩機

銅山の隆盛と町部の発展は比

例してきます。銅山の産銅量が増えれば増えるほど、町部の商店も活気を増していきます。逆に言えば、町部の様子を見れば、その当時の銅山の景気がわかります。

鉱山町の状況、ひいては足尾銅山の隆盛ぶりがどのようなものだったのか、鉱山町の主役である鉱員ではなく、銅山が全盛期を迎えている頃の町部の様子から、見ていきましょう。



町の中央部を練り歩く山車行列

第2章 常盤通り



山車が練り歩く常盤通り

構内：直利屋食堂

通洞駅

口 道

多島齒科

東屋菓子店

芸者見番

高草木印判店
阿部薬局

鶴屋旅館跡

伊原新聞店
伊東釣具店
サゲハシ茶店

のぼりや
料理屋

通洞運送店

鳥茂・
芸者屋

泉屋旅館

通 り

大野屋酒問屋

洋服店
東京百貨・
手巻寿司屋

花屋

相田置屋

藤田たばこ屋

足尾郵便局

神山支店

ますや・肉屋

安藤呉服店

関東配電
足尾出張所

松原公会堂

上岡機械場

からす屋

峯月・料理屋

上岡建具店

川本食堂

便利屋

床屋

魚屋

カフェー

柳沼金物店

山田床屋

通 り

高久古物屋

岡部八百屋

峰岸豆腐屋

野田二合寮
酒屋

岩本菓子店

料理屋

喜楽屋・

おでん

喜久廻屋・

青柳菓子店

小池たばこ屋

足尾キネマ

西養軒・カフェー

青木屋菓子舗

松田たばこ屋

森山八百屋

二島八百屋

清水駄菓子屋・一銭店

駄菓子屋・一銭店

サゲハシ綿店

壁長屋

壁長屋

病棟

通洞病院

1940(昭和15)年
頃の商店マップ

(地域住民の記憶を基に作成)



足尾一の繁華街

常盤通りは「職人と華の町」と言われ、印半纏しるしはんてんを着た職人や、髪を結い、着物で着飾った芸者がいる町でした。そんな常盤通りにはブリキ屋、建具屋、古物屋、菓子屋のほか映画館までありました。



銀座通りの様子

足尾銅山観光入口を背にして、交差点を右に曲がると、緩やかな上り坂があります。この道が銀座通りです。銀座通りを上がつていくと、途中、右に曲がる道があります。この道が、常盤通りです。この章では町部ちやうぶの中でも



銀座通りから右に逸れて矢印の方向が常盤通り

特に賑わいを見せた常盤通りの商店を中心に、その様子を明らかにしていきます。

常盤通りや昭和通り付近は、地区名を松原まつばらと言い、江戸時代には隣の赤沢あかさわ地区と同様に足尾町の中心地で、幕府直営の銅山

奉行所もあり、注5足尾千軒と言われる程に栄えました。明治時代になって銅山が民営になり、1896(明治29)年、通洞坑(現在、足尾銅山観光になっている坑口)が開坑すると、再び足尾町の中心地として活気づいていきます。江戸時代の隆盛を知るとはもう出来ませんが、常盤通りにある高久古物屋で生まれた方が、昭和に入ってから活気ある様子を語ってくれています。

「宿」一番の繁華街 松原常盤通り

しゆく

ときわ

私は、生まれも育ちも松原です。聞く所によれば、松原と赤沢は江戸時代から「宿」と呼び、「足尾千軒」の中心として盛んだったそうです。松原の主な道路は、「銀座通り」（現在の*国道）、若竹食堂から青柳菓子店までを「常盤通り」、二島商店から安塚菓子店までを「昭和通り」と言つて、賑やかな場所でした。

特に常盤通りは、「職人と華の町」と言われ、毎晩のように坑夫さんや職人さんの酔っぱらい。15日の銅山の勘定日には道にあふれ、必ず喧嘩の1つや2つはありました。

私は常盤通りのまん中の古物屋に3歳の時、幸町（壁長屋付近の地名）の実家から、養女となりました。私の家の隣は川本晝店、前は松島ブリキ店、その左は鈴木桶屋、そして右前は上岡建具店。間口も7間でひとときわ大きく、若い衆や職人も10人位いました。

*現在は県道【2019（平成31）年現在】

「上岡」の次男坊けんちゃんには、いたずら坊主でしたが、お父さんは優しい人で、近所の人を招いて活動写真（手回し）を見せてくれたりしました。今でも思い出します。

私の養父母は、しつげが厳しく、私をあまり外へ出さず、お裁縫などをやらせましたが、実家では口にした事のないお菓子や、果物を必ずおやつに出してくれました。

私は町外の高校へ入つて、将来の夢もあったのですが、養父が亡くなり断念。当時足尾で唯一だったパーマ屋「ミツ美容室」に入り、跡を継ぐ事になりました。



上岡建具店。昭和初期の頃にしてはモダンな外観で銅山御用達の建具屋だった。

明るい町新聞連載 町民がつづる足尾の百年第3部より抜粋

常盤通りの商店マップを見ると、所狭しと商店が並んでいるのがわかります。今ではほとんど見られなくなった桶屋や射的屋、^注見番なども見ることできます。最初に出てきた壁長屋も見られます。しかし、残念ながら商店マップに載っているお店で、現在も営業を続けているところは、数軒を残すのみとなっています。



常盤通りの入り口

ここでは、常盤通りの始まりの場所に位置する若竹食堂の女将さんに、話を聞きました。ここは、1937(昭和12)年創業の大衆食堂でした。当時は銃員でお店は満員だったようです。銅山が閉山してからも営業を続けてきた若竹食堂ですが、2013(平成25)年をもって、閉店してしまいました。足尾の人でこのお店に思い出のある人は、たくさんいます。



閉店後の若竹食堂

射的屋とは

商店マップで高杉工務店の下に、射的屋と書いてあるお店があります。射的屋と言うと、今ではお祭りの出店を想像しますが、このお店は少し違いました。この射的屋は^{注7}風営法で規定された風俗営業にあたり、18歳未満は遊ぶことができませんでした。商品が欲しいばかりにお金をつぎ込んでしまうのが、今のパチンコと同じだと考えられたためです。遊び方は今と同じですが、射的屋で働く人は多くの場合、女性でした。そこで男たちは女性にかっこいい所を見せたい一心でのめり込んでいってしまうというわけです。



「酒1杯に着付き」が売り文句

さかな

若竹食堂は1937(昭和12)年に創業。私はここへ嫁に来て、最初は忙しい時だけ店を手伝ってましたが、店主が亡くなったので、本格的に店に入るようになりました。

一番お店の景気が良かった戦後から1970(昭和45)年くらいまでは、忙しい思いをさせてもらいましたね。お客さんは鮎員さんだけではなく、群馬県東村沢入(かづま せうり)の石屋さんなんかも来てました。特に1日と15日は、沢入の石屋さんのお祭りがあるので、若竹に家族全員でおめかしして来て、1杯飲んで蕎麦を食べて帰るっていうのがお決まりのコースだったみたいです。あとは映画館注がはねたときですね。映画終わりに、うちで1杯飲んで、子どもたちにラーメン食べさせてっていう人は多かったです。それと、昔はスポーツも盛んでしたから、野球クラブの宴会や「酒3杯会」なんていう飲みサークルなんかも、よく来てました。

若竹の売りは「酒1杯に着付き」でした。酒にお金をかけても、お通しにお金をかけないで飲んでもらうために、酒1杯につき魚1切れでも、とろろを少しでも出せるように、常に10種類ぐらいの肴を用意していました。だから、お客さんの中には「10杯飲んだら、肴が一回りして最初に戻るかと思ったら俺の方が先に潰れた」というエピソードもあります。

店のテーブルは特にこだわりました。足尾の唐風呂地区から切り出した柝の木で作った、一枚板のテーブルです。このテーブルが4つあって、それを囲むように、相席みたいな感じで、椅子があれば誰でも座りました。「ここ割り込めますよ」って言ったなら「あいよー」ってみんなが席を譲る。そういう心遣いはお客さんにいただきましたね。



地域おこし協力隊 中山が聞き取りし、要約

若竹食堂の一枚板のテーブル

当時、鉱員で賑わっていた若竹食堂から道を進むと、右側に車が止まっている場所があります。ここは商店マップでは田口床屋にあたる場所ですが、現在は空き地になっています。ここを右に曲がると、壁長屋やスレート1トの壁が建っている場所に出ます。壁長屋に通じる道を境にして、右側が坂田長屋、左側が壁長屋です。



矢印の所で右に曲がると、壁長屋に通じる道

壁長屋と坂田長屋は一部分ですが、現在でも残っています。この辺りには、珪肺にかかった人が多く住んでいました。珪肺とは、珪石等の微粒子を吸い込んだことが原因で起こる疾患です。通気性の悪い坑内で、岩盤を掘り進む鉱山労働者に多い病気でした。岩盤を掘る際に舞う粉塵を吸い込むことで肺が傷つ



上の写真で矢印の所を曲がって右側が坂田長屋、左側が壁長屋

き、それを治そうとする体の働きによって肺は固くなります。その結果、呼吸をする際に肺が膨らみにくくなり、呼吸困難になるというのが主な症状です。壁長屋付近は珪肺病を患い、銅山で働けなくなったことで社宅を出ざるを得なくなった人たちが、行き着く場所でした。ここで当時、壁長屋の近くに住んでいた方のお話を紹介します。常盤通りや昭和通りが賑わいを見せる中、壁長屋付近は町部の陰の部分とも呼べる場所でした。

人情のつながり 幸町で80年

さいわいちよう

私は通洞の銅山長屋で生まれました。父は通洞坑のさく岩夫でしたが、32歳で落盤事故で亡くなりました。その頃は連日のように事故があり、坑外に運び出す担架が、青い毛布なら怪我、赤い毛布なら死亡だと言われていました。

父が亡くなってから銅山長屋に居られなくなり、松原の壁長屋横の通りに転居しましたが、3年後に母も亡くなり、祖父母に育てられました。この辺にはヨロケ（珪肺）の人が多く、今のような保障制度もないので、やせ細った体に粗末な綿入れ半纏はんてんを着て、日向ぼっこをしている姿をよく見ました。

通洞と壁長屋の間には、現在も残っているスレート波板の塀が立てられています。そのそばで、祖父はマツサージ、祖母は注9一銭店いっせんみせを開いていましたが、子どもがたくさん居る時代で大忙しでした。

壁長屋とすじ向かいの坂田長屋も裏町、商店や注10請負師うけおしなどが住む常盤通りを表町と言っていました。暮らし向きも差があったのでしよう。しかし約30戸の壁長屋には相互会という組織があり、今も続いています。人情味あるつきあいで結ばれています。私は足尾小学校6年で卒業し、東京の叔母の食堂で手伝い、お裁縫や、ししゅうも習いました。5年程で終戦となり、足尾に帰り結婚。夫は京都の友禅染の絵付け職人で、身体があまり丈夫でない人でした。私は土方の「注11いっぱち背負い」や、国鉄線路工夫こくふの注12てこなど何でもやりました。少しでも収入が増えるように夢中で働きました。

振り返れば今日までほぼ80年、幸町に住み、3人の子供を育てましたが、波乱万丈の一生だったと思います。今年で90歳。今は1日1日をゆつたりと過ごしています。

明るい町新聞連載 町民がつづる足尾の百年第3部より抜粋



松島板金店の写真。矢印の場所には細い路地

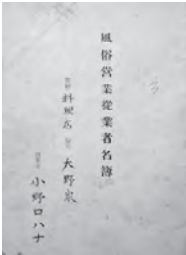
引き続き、表町^{おもてまち}と呼ばれる常盤通りの様子を見て行きます。

かつて田口床屋があつた道をまっすぐ進むと、松島板金と書いてあるお店が見えます。そのお店の右側には細い路地があります。この道を進むと、昔で言えば大野屋酒問屋^{さかどんや}(現・さんしよう家)の右横に出ます。この道の途中には小さい扉があり、大通りからでなくてもお店に入れるようになっていきます。



建物と建物の間に細い路地があるのがわかる

大野屋酒問屋は、1940(昭和15)年頃は、おもに酒の卸売業をやっていました。別^{注13}に、芸者屋としても営業して行きました。脇道にある扉は、芸者屋に行くお客のためのものです。また、さんしよう家の店内には1955(昭和30)年頃の風俗営業従業者名簿が残っています。常盤通りには、こういったお店が数軒ありました。



風俗営業従業者名簿



現在のさんしよう家の外観



路地の途中にある扉

松島板金から見て前方には、水色の屋根が印象的な川本食堂があります。川本食堂の歴史は古く、1912(大正元)年頃創業で、現在も営業しています。

元々は食堂ではなく、畳屋として営業していました。はじめ



現在の川本食堂。右下は1935年頃発行された足尾町商工案内の一部



お祭りの様子。左側が川本食堂。現在、ベランダはなくなっている

現 舗として使
ていて、そこ
に芸者をあげ
て遊ぶという
のも珍しくは
ありませんで
した。
今のご主人

は、畳屋の職人を寝泊まりさせ、賄いを作るだけだったようです。が、従業員の食事を作るだけではもったいないということ、食堂として開業しました。

左の写真を見ると、ベランダには祭りの見物をしている人がたくさんいます。この人たちは芸者さんで、昔は2階部分も店

は4代目で、足尾出身の著名なフランス料理人である関塚喜平氏の元で修行をしていました。

足尾と西洋料理の関係は深く、100年程前には足尾で西洋料理のフルコースを食べることができたほどです。ここで、一旦、常盤通りからは離れて、足尾と西洋料理の関係についてお話しします。



現在の川本食堂の店内

足尾と西洋料理

足尾と西洋料理の關係性を説明する前に、関塚喜平氏について触れておきます。関塚喜平氏は1898(明治31)年、上間藤地区で生まれました。東京に出て料理の修行をして身を立てようとして決心し、15歳にして足尾を出て、上京。20歳で築地精養軒に入社。その後、東洋經濟新報社食堂、早稲田大学大隈会館食堂を経て、72歳で当時、業界でも最高の売り上げを記録した「喜山」を設立しました。

関塚喜平氏は、宮内省の料理長で、天皇の料理番としてメデ

イア等でも取り上げられている秋山徳蔵と親交があった一方、政界ともつながりがあり、元内閣総理大臣の石橋湛山は、東洋經濟新報社時代の喜平の恩人で「喜山」の「山」は石橋湛山の「山」から取っているといえます。そんな関塚喜平氏を生んだ、足尾の食文化というのはどういうものだったのでしょうか。



関塚喜平氏

そもそも、なぜ、山深い足尾に西洋料理が入ってきたのかというと、1897(明治30)年、足尾鉱業所長を命じられた近藤陸三郎が關係しています。その頃、足尾鉱毒事件が田中正造の運動によって議会でも大々的に取り上げられ、政府は鉱毒予防工事命令を下しました。

その内容は、「工事が期間内に終わらない場合は、鉱山を操業停止にする。」というとても厳しいものでした。昼夜を問わず、町民総出で、脱硫塔・沈殿池・堆積場の建設に追われました。「小野崎一徳写真帖 足尾銅山」には、「工事の具体的指示は、本社で



(右上)建設中の脱硫塔 (右下)脱硫塔完成
(左上)建設中の沈殿池 (左下)沈殿池完成

は木村長七ちやうしちが、足尾では近藤陸三郎が務めた。銅山は40日間坑内作業を中止し、傘下の鉾山などからも応援隊を送り込むとともに、足尾の町民たちも1戸1人ずつの男子を出して、手弁当で手伝って工事を期間内に完成

させた。」とあります。総力を結集して、この工事を完遂したことがわかります。

その落成祝賀会が行われる際に、1万5千人分もの料理を一丸旅館と共に担当したのが、当時、会社の職員のための食堂である本山賄まかないを任されていた喜平の父の関塚嘉平かへいです。

祝賀会は盛況に終わり、これを機に近藤は関塚を気に入り、1903(明治36)年、関塚嘉平を館主に据え、上間藤地区に「暢和館ちやうわかん」という高級旅館を建設しました。

近藤は、鉾山技術の進んだフランスやドイツに度々、視察に

行っていたため、西洋料理に触れる機会が多くありました。そこで、足尾に来る客にも西洋料理を食べさせたいとの思いから、横浜のホテルのコックを自宅に雇い、関塚嘉平の息子で、喜平の



暢和館外観



(上)暴動鎮圧のため出動した高崎第15連隊3個中隊 (下)暴動によって荒廃した本山

兄の弥三郎やさぶろうに西洋料理の勉強を勧めました。そのおかげもあり、暢和館では西洋料理のフルコースを作ることができたと言います。今から100年以上前に、足尾で本格的な西洋料理が食べられたというのは驚きです。

その後、1907(明治40)年に本山地区で鉱員による大暴動が起こりました。一時は軍隊も

出動する程の事態になり、本山地区は壊滅状態になりました。

これによって鉱業所が掛水地区に移ったため、本山賭も掛水に移り、以後、掛水賭と呼ばれるようになりました。掛水賭も本山賭と同様に、職員のための食堂で、一般の鉱員には敷居が高い場所でした。そんな掛水賭の料理が鉱員たちに盛大に振舞われたのが、1925(大正14)年から始まった園遊会です。これは全従業員を対象にした慰労会で、



小野崎一徳写真帖 足尾銅山

掛水に移された鉱業所。1920(大正9)年に売却され、その跡地で園遊会が開かれる。



小野崎一徳写真帖 足尾銅山

総勢5000人の料理を掛水賄が一手に引き受けました。現在の古河掛水倶楽部横の空き地（以前、鉱業所があった場所）で行われた園遊会には、社長も参加し、鉱員たちに酒を注いでまわることもあったそうです。

園遊会の仕出しや古河掛水倶楽部を訪れる要人への接待を任され、足尾での地位を不動のものにしていった関塚家ですが、何も西洋料理だけに特化しているわけではありませんでした。

関塚嘉平の弟の常二郎は享保年間（1716～1736）に開業した会席料理の老舗・八百善で修行した和食の料理人で、嘉

平の孫の富三は大連に行くなどして本格的な中華料理を習いました。つまり、関塚家は「和・洋・中」全てにおいて精通していました。富三の中華料理は、銅山が閉山した後、通洞駅前にあった泉屋旅館で食べることができましたが、暢和館、掛水賄と同様に、今では建物自体もなくなってしまうっており、足尾で関塚家の料理を食べることはできなくなっていました。

しかし、関塚喜平氏の弟子で、NHKの連続テレビ小説「ひよっこ」の料理監修を務めた菅沼豊明氏は足尾の出身であり、現在、国民宿舎かじか荘の料理監

修をしています。1897（明治30）年から脈々と受け継がれてきた西洋料理のエッセンスは形を変えながらも、今も足尾に息づいています。



現在の国民宿舎かじか荘の外観

足尾町の食文化の高さに誇り

私の祖父は栃木で造り酒屋をいとなみ、また鹿沼で八百屋なども営業、粕尾峠を越えて食料品などを足尾へ卸売りしていました。大変景気が良いので足尾へ店を持ったのです。

父・弥三郎は本山中で賄所を経営。足尾鉱業所は本山にあつて、鉱業所の中心地でした。鉱業所の近藤所長は技術導入のため何度も外遊され、洋食を好まれた人で、横浜海浜ホテルの牧田チーフコックを足尾へよび、父は牧田チーフに師事しました。

私は1908(明治41)年、掛水賄で生まれました。この頃は鉱業所は掛水に移っており、1924(大正13)年からこの仕事に入りました。この頃の掛水クラブは、毎晩まいばん宴会の連続。何しろ足尾には芸者さんが45人もいた時代です。正月の新年会と春の園遊会は、それはそれは賑やかでした。坑夫4500人、職員500人、計5000

人の食事の準備をしました。鯛の塩焼きの入った折詰。場所は現在のテニスコートや川沿いの芝生の所です。

足尾の食文化を語るには前出の近藤所長が「1日中、太陽にあたらないうで働く坑夫は、栄養を取らなければ」と言つて、農園でトマトを栽培したり、養豚所を作つて安い豚肉を提供したこと等は、子供心に深く植え付けられています。

1926(昭和元)年、東京で汎太平洋学術会議が開かれ、その一行が足尾の製錬所を見学することになったとき、外務省は、食事の材料とコックを同行させようとしたが、古河鉱業株式会社本社が「足尾には関塚がいるからその必要はない」といつてくれたので、私が料理を作りました。

* 関塚富三さんからの聞き取り



高橋クリーニング商会

川本料理店の目の前の道を進むと、右側に高橋クリーニング商会

と書いてある建物があります。

脇の道から入ってクリーニング商会の側面を歩くと、入口から奥に細長い形をしているのがわかります。商店マップを見ると、ここには昔、足尾キネマという映画館が建っていました。この細長い区画は映画館があった頃の名残です。前述の若竹食堂の女将さんが言っていた「映画館がはねたとき」の映画館とはこのことです。



(上)クリーニング商会の建物。細長い形をしているのがわかる
(下)中央の建物が足尾キネマ

テレビが普及する前はどんなに小さな町でも、少なくともひとつは映画館がありました。足尾にあったものは、数と規模共に、大きなものでした。それぞれ年代は違いますが、足尾にあった映画館・劇場は、確認できただけでも14館になります。ここでは、戦前から戦後にかけての足尾の映画文化について、紹介します。



足尾にあった誠之館という劇場の内部。
2000人、収容できる程の大きさだった

足尾にあった映画館・劇場

館名	場所	収容人員	概要
直利座	本山	1000人	年代：1917(大6)年頃築～不明 娯楽：映画、芝居
娯楽館	本山	900人	年代：1912(大元)年築～不明 娯楽：活動写真、芝居、碁盤、将棋盤、図書
小滝座	小滝	600人	年代：1907(明40)年頃築～1920(大9)年焼失 娯楽：演劇
鉾盛座 (後の小滝会館)	小滝	700人	年代：不明～1946(昭21)年焼失 娯楽：映画、演劇、集会場
小滝会館	小滝	不明	年代：1948(昭23)年築～1954(昭29)年閉館 娯楽：映画、演劇、演芸
城崎座	上間藤	1200人	年代：1917(大6)年築～1943(昭18)年解体 娯楽：歌舞伎、集会場、連鎖劇、映画
いろは座 (後のエビス座)	上間藤	600人	年代：1907(明40)年頃築～不明 娯楽：映画、芝居
エビス座	上間藤	600人	年代：不明 娯楽：映画
金田座 (後の足尾劇場)	赤沢	3000人	年代：1903(明36)年築～不明 娯楽：集会場、映画、連鎖劇、歌舞伎、芝居
足尾劇場	赤沢	1000人	年代：1955(昭30)年頃築～1993(平5)年解体 娯楽：演劇
足尾東映 末広映画劇場	赤沢	600人	年代：1957(昭32)年頃築～1969(昭44)年焼失 娯楽：映画
足尾館 (後の足尾キネマ)	松原	600人	年代：1902(明35)年築～不明 娯楽：映画
足尾キネマ	松原	600人	年代：不明～1969(昭44)年焼失 娯楽：映画
誠之館	中才	2000人	年代：1929(昭4)年築～1959(34)年焼失 娯楽：サーカス、集会場

町の全盛期に少年時代

私は、足尾の上間藤^{かみまとうとう}で1924(大正13)年に生まれました。昭和の初め頃は、上間藤だけで肉屋さん^{さん}が3軒あって、あと野菜市場と魚市場がありました。鮪^{まぐろ}が2本か3本来て、それを毎日捌いて、八百屋さんが持つて行きました。豚でも小間切れで売ってるんじゃないくて、3頭くらいそのまま下がつてました。その頃、冷蔵庫がないですからね。その量が数日で消費できました。この町が全盛時代の頃ですね。

上間藤には、城崎座^{しろさきざ}つていう劇場もありました。城崎座は歌舞伎座と同じつくりで、回り舞台もありました。そこは、城崎さんつて人が造つたんですけど、終戦前に、解体して材料を売つたみたいなんです。そのお金が3000円(現在の価格にすると約540万円相当)。そのお金をどうしたかつていうと、足尾にいた芸者を身受けしたんです。

よ。ところが、身受けした芸者が1週間で逃げちやつた。そんな話もありましたね。

私は城崎座では芝居を見ました。子どもときは、お金ないから、近くの石垣から2階の窓へ渡つて見たこともありましたよ。映画はエビス座が専門でやつてました。^{注14} 弁士さんもいて、多いときには、両脇に2人立つて説明してたこともありました。弁士^{注15}さんはトーキー映画になつて音が出るようになると、紙芝居屋に転向していきましました。紙芝居は夢中で見てました。猿飛佐助とか面白くて面白くて、毎日、紙芝居屋さんが来るのを楽しみにしてました。もう昔の話ですが、どれも私にとつては、つい最近のことのように感じます。



紙芝居に夢中な子どもたち。場所は本山

戦前の映画

戦前は^{注16}サイレント映画(無声映画)の時代でした。1917(大正6)年の建築にしては円形状の屋根が特徴的な城崎座では、チャップリンの無声喜劇や探偵活劇などが上映されていました。



上間藤に建てられた城崎座。現在は解体されている。

しかし、城崎座での映画の上映は昭和に入ってからのもので、それまでは歌舞伎を中心に公演を行っていました。こけら落としには、松本幸四郎一座を呼んだ程です。その時には、「下見に来た人が、『舞台は総檜でなければ、拍子木の響きが悪い!』と言って全部とるかえた」(足尾の百年第一部より)というようなこともあったそうです。他にも市川猿之助、中村勘三郎等、歌舞伎界の名門が城崎座で公演を行いました。その後、昭和に入ってから映画の上映が始まると、城崎座や金田座では、映画と演劇を組み合わ

せた連鎖劇(芝居では表現が難しい部分に映像を入れて補った演劇のこと)なども行われるようになりました。1930(昭和5)年頃には、弁士つきの映画が上映されるようになり、戦後はトーキー映画(有声映画)が主流になっていきます。

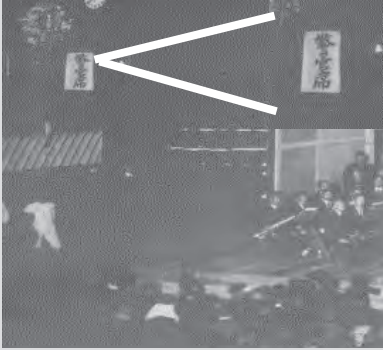


城崎正一郎氏 所蔵

松本幸四郎一座。城崎座こけら落としの写真

戦前を象徴することのひとつに「臨監席」の存在があります。

「臨監席」とは、公演内容や弁士の語りに不適切な内容がないかどうかを見張るために、劇場などに設けられた警察官が座るための席のことで、「警官席」とも言われていました。もしそこで



小野崎一徳写真帖 足尾銅山

1929(昭和4)年の誠之館の写真。左側に「警官席」と書かれている

不適切な言動があれば、警察官が「中止」と叫んで、指導が入ります。この席は、金田座や誠之館、城崎座にありました。これらの劇場は、これまでに各団体の演説や集会に利用されてきたという背景があるため、警官席が設置されたのだと考えられます。

戦前は言論統制によって、上映することができると映画にも偏りがありました。しかし、この抑圧が戦後の映画全盛、足尾映画研究会発足に繋がっていきます。いろは座の興行主だった工藤常之助の息子である工藤時之助さんが、その当時の状況について語ってくれています。

戦時中の遺構

上の「警官席」が写った写真は、戦時中の様子を知るための貴重な資料です。

他にも足尾には、戦



新梨子油力発電所。迷彩柄が施されている



道路沿いに見える油力発電所の外壁。微かに迷彩柄の跡が見えます。黒いシミのようにしか見えませんがよく目を凝らすと迷彩模様になっているのがわかります。

いろは座・金田座・足尾キネマ

父常之助は、秋田出身の渡り坑夫だったそうです。後に深沢の入口に、いろは座(エビス座の前身)をつくり、小屋持ちの興行師となりました。

私は、1916(大正5)年、赤倉の生まれ。当時は、町の人口が3万8千人と、宇都宮に次ぐ全盛時代で、城崎座のこけら落としに松本幸四郎を呼ぶほどでした。

他に楽しみが少ない時だったので、芝居や活動写真、^{注17}浪花節などに人気が集まっていました。芝居の一行は、15人から20人位。「五厘屋」^(注18)マージンを5%とる興行師)の口利きで巡業していました。みんな「アゴ持ち」(食事つき)でした。芝居は3〜5日間で終わりますが、先のあてがなく、うちの楽屋に半月も泊まっていた一行もあり、楽屋には弁士・映写技師・何人かの楽士などがいました。

私の両親は「親方」「姐さん」と呼ばれていまし

たが、仕事のない芸人さんにも飯は食わせねばならず、見た目は派手でしたが、やりくりに苦労したと思いますよ。それでも「お天道様と米の飯はついてまわる」って、昔の人はのん気だったですね。浪花節は、小屋でやる他に、クラブ(寄合所)まわりもやっていました。出演料はなしですが、おひねりでもらう「おはな」が、いい小遣いになったようです。

大雑把な経営で苦しくなり、父はいろは座を人に譲って、金田座で興行をすることになりました。金田座では、高松^{注19}レビュー・松旭斎天勝の奇術などが大変な人気で、いつも大入り満員。高松レビューは年に2回程来ましたが、若い子の踊りと豪華なバックの幕が次々と早変わりするのに目を奪われたものです。興行師の子に生まれ、私もその道に入りましたが、やがて映画の時代となり、私は映写技師になりました。

戦後の映画全盛

町の中に病院や裁判所、警察署、幼稚園、高校までもがあり、町の中だけで生活が完結するため、外の社会との接点が少なかった足尾の人たちにとって、映画は唯一の娯楽であり、子ども

から大人まで、多くの人を魅了しました。1950(昭和25)年の映画は3本立てで、30円(今の1000円程)。子どもでもお小遣いを貯めれば、充分見ることができるとは。戦前・戦中の言論統制下からの解放感も相まって、その頃は映画の全盛時代でした。

しかし、戦争が終わった直後の1940(昭和15)年代後半、上映する映画は邦画が多く、洋画は公開後、時間が経つてから足尾に来るような状況でした。そこで、封切り間もない洋画を早く観ようということが始まったのが、足尾映画研究会(以下、

映研)です。映研は、1947(昭和22)年、会員数36人から活動を始め、1959(昭和34)年、映研発足から12年で、約2500人もの会員を抱える大きな組織となりました。会員数の急増に伴い、当初、映研の映画は、足尾キネマだけで上映されましたが、それだけでは間に合わなくなり、上間藤のエビス座でも上映され



(左上)足尾幼稚園 (右上)足尾警察署
(左下)足尾高等学校 (右下)足尾簡易裁判所

新井常雄撮影・栃木県立文書館所蔵
(右上・右下の写真)



上がエビス座、下が足尾キネマ
この2館で映研の映画が上映された

るようになりました。

映研の活動は、外国映画の上
映だけにとどまらず、教育映画
を上映して児童感想文を募集す
るなどの社会教育にも貢献しま
した。

足尾にあった映画館や劇場の
中で、娯楽館や誠之館など、5館
は会社の運営でした。会社が建
てたものは、従業員の福利厚生
施設という意味合いが強いです
が、それ以外は興行主が建てた
ものです。9館もの映画館・劇場
が会社とは関係なく足尾にでき
たということは、それだけ需要
があったということです。それ
ほどこまで、映画文化は、足尾町

全体を席卷せっけんしました。

足尾で生まれた文化は、先に
挙げた、西洋料理の起こりなど
をみても、どうしても銅山と紐
づく部分があります。企業城下
町という言葉があるように、企
業の一挙手一投足が、町の盛衰
を左右する社会において、足尾
の歴史は、銅山の歴史であり、一
企業の歴史です。そんな中でも、
映研やそれに付随する映画文化
は足尾全域に広く普及しました。
もちろん全国的にもそういった
風潮があったにせよ、住民が自
発的に起こした活動が、町部や
社宅も関係なく、足尾の娯楽の
中心になったという経緯は、足

尾にとっては貴重な町の歴史で
す。

戦後の映画文化の状況は、足
尾キネマの映写技師だった方が、
語ってくれています。



新井常雄撮影・栃木県立文書館所蔵

足尾東映末広映画劇場前の人だかり

夢も恋も生まれた映画を映して

私は1947(昭和22)年に見習いとなり、10年余り足尾キネマの映写技師をやりました。勤めは選鉱の鍛冶屋でしたが、機械いじりが好きで、夜のアルバイトに入れてもらったのです。

指導は工藤常之助技師で、映画がはねてから講義をやってくれました。先輩には苗岸かおるさん、県内でも数少ない女性技師を目指していました。映画1本は、8〜11巻のフィルムを2台の機械で交互に映すので、のぞき窓から画面に目を離さずに見ていました。

テレビがない時代ですから、楽しみといえれば第一に映画、お客もいっぱいでした。「姿三四郎」、「ある夜の接吻」など人気があり、原節子、藤田進主演の「麗人」は押すな押すなの盛況でした。

一番の悩みは品質が悪いのでフィルムが切れること。フィルム番号を示すリーダーがなくなつてわからなくなり、容器の番号順に映したら、物事

の後先が逆になった大失敗もありました。

キネマとエビス座がかけ持ちで同時上映されていたので、人手がないときには自分でフィルムの運搬もやりました。そのために、タイヤの側面をローラーでこすつて走る原付自転車の第1号を買いましたが、小滝の坂は登れませんでした。

小滝会館、直利座にも出張しました。山神祭の前夜祭で誠之館に入ったときには慌てました。スイッチを入れても映写機が回らないのです。奈落を調べたら電線が全部盗まれていました。朝鮮動乱の注20金へんブームの時でした。

当時の文化の中心は映画でした。楽しみも夢もそしていくつもの恋が、この中から生まれたのではないのでしょうか。



矢印が指す場所に通洞病院があった

足尾キネマのあった道を下に行くと、左前方に水色の中高層住宅が建っています。商店マップでは、昔、通洞病院があった場所です。通洞病院は、その正式名称を「足尾鉱業所附属通洞病院」と言い、1896(明治29)年に会社が建てた病院です。他にも足尾には2つの附属病院がありました。それらは全国の鉱山附属病院と比べても、1908(明治41)年の医師数・薬剤

(上)矢印が指すのが連絡通路
(下)階段になっていて道の下に連絡通路があった



師数・収容人員はトップクラスでした。(日本鉱業発達史参考)

それを裏付けるように、通洞病院のすぐ側には、2階建ての病棟がありました。右側上の写真で、右の建物が通洞病院、左にある建物が病棟です。通洞病院と病棟は、連絡通路を介して行き来ができ、現在、階段になっている道の下の部分には、通



金網越しに扉が見える

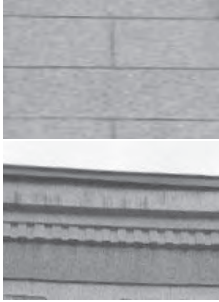
洞病院と病棟をつなぐ連絡通路が通っていました。

かつて病棟があった場所は、現在、日光警察署足尾交番になりましたが、こちら側には今でも、連絡通路の痕跡が残っています。階段を下りて、金網越しに階段付近の場所を見ると、通路を塞いだ時につけたと思われる、錆びた鉄の扉が見えます。

昔、足尾キネマがあつた高橋クリーニング商会の目の前には周りとは違う特徴を持った西洋的な建物が建っています。これは、商店マップにある西養軒というお店で、外観は当時のまま残っています。建物は^{注21}モルタル塗りで、そこに目地を入れることで石造り風に仕上げられています。



(上) 西養軒。現在は住居として使われている
(中) 石造り風の外壁
(下) 段々に突き出た軒蛇腹



そして、洋風建築の特徴である装飾を施した軒蛇腹(建物の軒に帯状に取り付けた突出部分)も見られます。これは、いわゆるカフェー建築と言われるもので、1935(昭和10)年頃に発行された足尾町商工案内を見ても、高級カフェーと書いてあるのがわかります。

カフェーと言っても、今のカフェのようにコーヒーを売りにしているお店だけではありません。昭和初期、カフェーの営業形態は大き

く分けて2種類ありました。ひとつは「純喫茶」と言つて、現在のようにコーヒーや軽食を楽しむことができるお店。それに対してウエイトレスと話しながらお酒を飲むことを売りにしているお店のことを「特殊喫茶」と言いました。今でも「純喫茶」と名の付く喫茶店を見かけるのは、カフェーを呼び分けていた頃の名残です。



足尾町商工案内の一部

西養軒は足尾町商工案内の写真を見ても、ウエイトレスが多いため「特殊喫茶」だったと思われます。地域の方によれば、足尾キネマで映画を見た帰りに、西養軒に立ち寄る人は多かったようです。

再び、常盤通りに戻ります。川本食堂の左斜め前には岩本菓子店の店舗が見えます。岩本菓子店は現在、この店舗では営業しておらず、足尾銅山観光内のお店で和菓子ではなく、お土産品を売っています。

昭和初期は、松原地区だけでなく7軒もの菓子店がありました。今では、純粹に和菓子を扱って



現在の岩本菓子店の様子

いるお店は、青柳菓子店と安塚菓子店の2店舗だけになりました。

商店マップを見ると、川本食堂の近くに、「からす屋」というお店があります。名前だけを見るとわかりにくいですが、この

お店も和菓子屋さんです。今の足尾名物と言えば、「あんこ玉」と「足字銭最中」ですが、昭和初期は、からす屋の「からす団子」が足尾の名物でした。からす屋という名前は、お店で実際にからすを飼っていたことから付けられたそうです。からす屋で生まれ育った方が、その頃のことについて語ってくれています。



昔、からす屋があった路地

足尾名物 “からす団子”

私は祖父の代に始まった「からす屋」という菓子店に生まれました。場所は松原の奥田衣料店の向かい側になります。店先に1羽の烏からすを飼っていたのが屋号の由来でした。商標も松の木に烏が串団子をくわえているデザインで、印半纏の背にも染め抜かれていました。

祖母の話では、「この烏が店になつたので、飼うようになつた」とのこと。生の馬肉が好物で、大事にしたせいか30年も生きました。

店の名物は「からす団子」で、これが店の通り名となり、祖母、両親、お手伝いさんでかかっても間に合わない時には、私も小学2年生ぐらいから手伝いました。母は上しん粉を棒状に延ばした物を三味線の糸で切る役目でした。たちまち団子の山ができる鮮やかな手さばきで、店先のお客さんが立ち止まって見とれていました。

家の下隣りは、便利屋という遊郭で女の人が5

〜6人いました。道に面した格子から、お化粧し着替えて、きれいになる女の人の姿を子ども心で眺めていました。

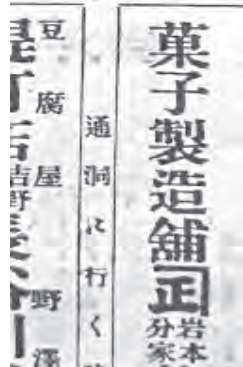
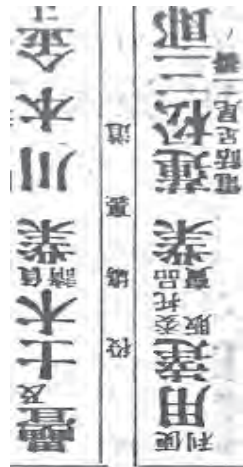
ある夜、通洞の坑夫のおかみさんが「お宅の物干場に上げてほしい」と言つて来たことがありました。そこから見える便利屋の2階にご亭主が来ているかどうかを、うかがうためでした。上隣りには青物市場があり、神子内、野路又、*下在から野菜が運ばれてきました。帰りにはうちの店で休み、団子をお土産に買って帰るお馴染みさんもありました。

昭和のはじめ、松原だけでも7軒の菓子店があり、年の暮れやお月見、紀元節などは、夜も寝られないほどの忙しさでした。

町民がつづる足尾の百年第一部より抜粋

*足尾の南部地区のこと(原・切幹・唐風呂・餅ヶ瀬地区等)

栃木県営業便覧の一部



先程の話に出た便利屋ですが、右の「明治40年発行の栃木県営業便覧」によれば、便利用達として記載があります。正面には、菓子製造舗・岩本分家。左には、まだ畳屋として営業していた川本の名前があります。

この便覧を見ると、便利屋に電話番号があるのがわかります。この時代に電話が付いているのは足尾でも、ごく限られた商店だけでした。便利屋の電話番号

は2番です。1番は、商店マップで通洞駅前にある泉屋旅館、3番が旧足尾町役場、4番が泉屋旅館の隣にあつた鶴屋旅館です。どれも、足尾の主要施設です。その当時、便利屋の商店主が、足尾の中で力を持っていたことがわかります。

足尾で現在でも営業していて、この便覧に載っている商店があります。それは、コロッケやメンチカツで有名なますや肉店です。



ますやは、100年以上
続いている商店の一つ

ますや肉店は、1907(明治40)年から今と同じ場所で営業を続けており、その頃は、牛馬売買商とある通り、牛や馬が丸ごと一頭いました。名前も榎屋と漢字になっており、注22(いえずし)家印には□(ます)の記号が使われています。



ますや肉店の店内

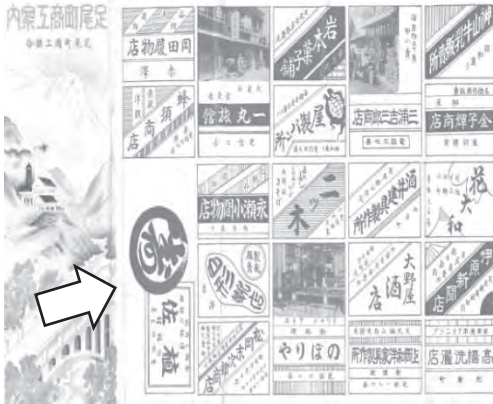
常盤通りの岩本菓子店を通り過ぎて、商店マップにある山田床屋までが、常盤通りです。その丁字路で左を見ると、植佐食堂の看板が見えます。植佐食堂は、今でも営業しています。

昔は、植佐寿司と言う寿司屋でした。現在は出前が中心のため、植佐寿司から植佐食堂に名前を変えています。



左に植佐食堂の看板が見える

1940(昭和15)年には、すでに営業していましたが、その頃は、目の前の道を挟んで、向かい側に店舗があったため、常盤通りの商店マップには載っていません。戦後から現在の場所にお店を作り、道の両側に2店舗構える程、大きいお店で、足尾を



足尾町商工案内の一部

代表する料理店でした。足尾町商工案内(昭和10年頃発行)を見ても、どの商店よりも、一際大きく掲載されています。

現在の店主さんに、植佐食堂がまだ、植佐寿司だった頃のお話を伺いました。



現在の植佐食堂の店内

月1回のご馳走 植佐寿司

足尾の鉱員は、みんな社宅に住んで電気、水道、家賃がただで、お金だけは持っていました。だから三種の神器って言って、テレビ、洗濯機、冷蔵庫、日本でもトップクラスに良い物が入っていました。そういう贅沢は出来たんですね。食べ物も同じで、うちの寿司を昼めしがわりに食べてくれる人もいました。寿司ばかりじゃなくて、豆腐、油揚げ、そば、うどん、生菓子とか、足尾のお店は、すごい上手で、腕が良かったです。

植佐寿司の創業は詳しくはわかりませんが、1924(大正13)年より前のようです。祖父は、群馬県東村沢入の出身です。そこから足尾に来て、いなり寿司屋を開業したのが、植佐寿司の始まりだと思います。

うちでは結婚式も出来ました。料理は立派な折に鯛を入れて、日の出かまぼこ、羊羹、海老、あとはくわい、筍を入れて1つの折ができる。それは

お持ち帰り用で、それ以外にお刺身、揚げ物、焼き物、煮もの、酢の物を作って、それで3000円とか5000円でやりました。みんな顔見知りでしたし、喜んで来てくれたから、儲けとかはあんまり考えてなかったですね。

足尾でお寿司を食べられるのは、うちぐらいでした。だから、月1回とかご馳走を食べるときに、うちに来る人も多かったです。魚は、築地から直で仕入れ。朝の6時に電話すると、その日の2時、3時には届きます。だけど、見て買えないから、そこは70年来の信頼で任せてました。向こうも70年の付き合いですから、うちにどんな物でも送れば、きちっとやってくれるっていうんで、都会の半分以下の値段で送ってくれました。

1955(昭和30)年頃は、50キロの鮪を丸ごと一匹捌いて、それが売れちゃいましたからね。従業員も18人ぐらいはいた頃ですね。

常盤通りの終わり、山田床屋
近くの丁字路で右を見ると、
青柳菓子店があります。

岩本菓子店の所でも取り上げ
ましたが、現在でも足尾で営業
を続けている2軒の和菓子屋さ
んの内の1軒です。

店主さんが、1人で店を切り
盛りしていることもあり、扱っ



現在の青柳菓子店の外観

ている和菓子は、足字銭最中だ
けですが、あんどは今でも、お店
で作っている自家製です。

普段は厨房の中で作業をして
いるため、店頭には立っていま
せんが、店内に入って、声をかけ
れば奥から出てきてくれます。

足字銭最中は元々、青柳菓子店、
岩本菓子店、安塚菓子店の3店
舗が、足尾のお土産品として売
り出し始めたものでした。



青柳菓子店の店内

そもそも足字銭とは何か

江戸時代、足尾では掘り出した銅を使っ
て、貨幣を铸造していました。作っていた
のは寛永通宝一文銭。お金の裏に足の字が
彫られていたため、「足字銭」という名称
で呼ばれていました。足字銭最中は、その
足字銭を最中にかたどった和菓子です。

足字銭は6年間しか铸造されませんで
したが、その6年間で約2億枚も発行され
ました。それだけ、社会に広く流通しまし
た。お金のことを「おあし」と言うのは、
この足字銭が起源だとする説もあります。



昔ながらの方法で和菓子作り

私は、1950(昭和25)年に生まれました。青柳菓子店の創業は1933(昭和8)年です。私で2代目になります。私は、足尾高校を卒業して、お菓子の専門学校に行きました。その後、洋菓子のお店で4年くらい修行しました。足尾に洋菓子のお店がなかったので、親父が和菓子で、自分が洋菓子やればいいかなって思ってましたけど、どういうわけか、今は、最中だけになっちゃいましたね。

最中は、1962(昭和37)年から作り始めました。足尾にお土産がなかったのので、安塚さん、岩本さん、青柳の3軒だけで、足字銭最中を作り始めました。今でも、北海道から九州のほうまで取り寄せの電話が来ます。

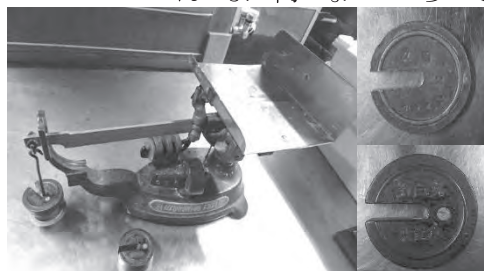
1970(昭和45)年くらいまでは、松原だけでも菓子屋は5、6軒ありました。昔は植佐さん



落雁の木型

で結婚式があるときは、鯛の落雁らくがんを出したりしてました。落雁の型は木に鯛の絵が彫られたものを使っていました。お餅を切ったりするときは、1寸5分とか2寸とかって、昔から長さが決まっているので、今でもセンチメートルじゃなくて、寸の単位の定規を使っています。あんこを計るときも、天秤てんていに重しをのせて計っています。単位は注23 匁もんめです。うちはずっと匁でやっているの、今でも、昔ながらの方法で計っています。

今は、お客さんも少なくなりましたけど、朝起きて、何もすることがないっていうよりも、お店開けて、お客さんと話すっていうのは、一番いい生活かなと思いますね。



現在でも使われている計り
右上は百匁。右下が五百匁

昭和通り

第3章



荒井屋洋品店が写る昭和通りの様子

口 道

1940(昭和15)年
頃の商店マップ
(地域住民の記憶を基に作成)

こいと・鯉養殖

永瀬小間物店

吉田屋洋品店

渡辺小間物店

渡辺酒屋

石川自転車店

渡

通

り

赤沢に至る

小島呉服店

末広屋履物店

天谷衣料店

川

飯田文具店

倉田板金店

写真店

一丸旅館

通

り

前原に至る

丸三工場

荒井屋洋品店

高橋酒店

鳥源
肉屋

安塚菓子店
松の湯
伊藤氷屋

佐々木豆腐屋

旧足尾町役場

君島代書屋

落合代書屋

倉田板金店

佐山
陶磁器店

川本畳屋

伊勢屋

通洞駅に至る

銀座

神山スポーツ店

大崎齒科

石並新聞店

鈴木薬局

中村電機

植佐食堂

未広離れ

足利銀行

大野書店

ニッ木
うどん屋

旭軒
そば屋

昭和

太田屋

神山牛乳
販売所

時計屋

石塚呉服店

安兵衛・
飲み屋

二島八百屋

専念寺

通洞に至る

星野一銭店

食品市場

商店を支えた女性のこゝと

鉾山で働く鉾員や商店を営む職人は、その多くが男性です。ここでは、これまであまり語られることがなかった、女性の仕事や生活について、各商店で働いてきた女性にお話を聞きました。



現在の昭和通りの様子

青柳菓子店の正面の道が昭和通りです。昭和通りは常盤通り付近の様子と比べると、それほど

どお店が密集しているわけでは
ありませんが、ここも常盤通り
と並ぶ、足尾の中心的な繁華街
のひとつでした。

昭和通りの商店マップに載っ
ているお店で、現在も営業を続
けている所は、安塚菓子店のみ
となっています。

商店マップを見ると、昭和通
りに入ってすぐに「ニッ木・うど
ん屋」とあります。現在、ニッ木
の店舗はなくなっています。

ニッ木の創業は、1935(昭

和10)年頃。戦争中に一度、お店
を閉めて、1964(昭和39)年
頃から、お店を再開しました。し
かし、1973(昭和48)年、足尾
銅山が閉山し、人口が一気に減
ってしまったため、1985(昭
和60)年頃に閉店しました。

足尾には、たぐさんのうどん
屋がありました。その中でも
ニッ木のカレーうどんは、地元
の人たちにとっても愛されたメニ
ューでした。

昭和通りの風景

私は、掛水で生まれました。父親は、掛水賄の料理人で、母親もそこでお手伝いさんとして働いていました。そこから独立して、二ツ木ふたの木を始めました。

お店の営業は、お昼から。すぐそこに映画館があつて、映画がはねるのが夜の11時頃。その帰りにお客さんが大勢来るので、それをさばいてると、お店を閉めるのは、12時位にはなつてました。しかも昔は年中無休です。お金はいらなから、休みたいって思つたときもありました。

お店が全盛だつたのは、私が子どもの頃なので1930(昭和5)年代ですね。その頃は、人口が2万人以上いたときです。足尾の商人は、みんな銅山がないと商売が成り立ちませんから。

お店にはテーブルが10脚、座敷に長テーブルが3脚、2階には宴会場もありました。50人以上は入れます。鉱員の給料日の15日には、お客さんで満杯でした。昼間は、鉱業所で給料をもらった鉱

員の奥さんたちが来て、飲んで食べて。それと入れ替わりで、仕事が終わつた旦那が飲みに来て。

だから酔っぱらいが絶えなかつたです。毎日、芸者をあげるようなお客さんもいたくらいです。ここが中心的な繁華街でしたからね。

^{注24}置屋は、何軒もありました。置屋にはお風呂がなかつたので、芸者さんは、安塚菓子店の横にあつた松の湯に入りに来てました。芸者さんが入りに来るのはいつも一番風呂。芸者さんの仕事が終わるときには、もう銭湯はやつてなかつたですからね。着物着ても肌が見えないように、背中までおしろいが付いていたのを、子どもながらに覚えています。戦後は、芸者さんはいなくなるし、商売もまったく出来なくなりました。男性は徴用で引つ張られて、ほとんどいなくなつたですから、女性も、選鉱場で鉱石の選別をする仕事で、暮らしを支えていたみたいです。



現在の大野書店の店舗

商店マップで二ツ木の隣には「大野書店」と書かれています。大野書店は、現在、営業していませんが、今でも店舗だけは残っています。

大野書店は、夫婦で切り盛りしていました。奥さんは、群馬県桐生市の出身です。昔は、群馬県から足尾へ来る道も今のようには整備されておらず、砂利道でガ

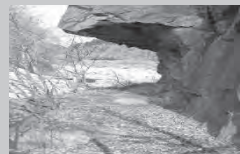
ードレールもありませんでした。また、1978(昭和53)年、足尾と日光をつなぐ日足トンネルが出来るまで、日光へ行くために通る^{注25}細尾峠は、道幅が狭く、カーブのきつい峠道でした。そのため、足尾から物資を運ぶためには、間藤駅と桐生駅を結ぶ足尾線(現在のわたらせ渓谷鐵道)が使われました。自動車普及するまでは、書店の本も足尾線によって運ばれました。



新井常雄撮影・栃木県立文書館所蔵

足尾と日光の間にある細尾峠

岩盤くり抜き輸送路に



この字型にくりぬいているのがわかる

1912(大正元)年に足尾鐵道が開通し、足尾―群馬間の物資の輸送は格段に改善されました。まだ足尾鐵道(現在のわたらせ渓谷

鐵道)が開通していない明治の頃は、渡良瀬川沿岸に馬車鐵道が敷設されました。しかし、わたらせ「溪谷」と言うだけあって、切り立った崖に馬車鐵道を通すのは容易なことではありませんでした。そこで、崖をコの字型にくり抜くことで馬車が通れるスペースを確保しました。これは笠松片マンブ(マンブは方言でトンネルのこと)と呼ばれ、今でも、その痕跡が足尾トンネル近くに残っています。



片マンブを通る馬車鐵道

桐生から足尾に嫁いで

私は、桐生で生まれました。母は、足尾の松原の生まれです。母は結婚して、足尾から桐生に行きました。私のご縁があつて、また足尾に戻ってきました。私が大野書店にお嫁に来たのが、1966(昭和41)年です。

母の祖父母が向かいの通りにある荒井屋洋品店をやつたので、小さい頃から足尾にはよく来てました。足尾線もその頃は、今みたいに速くなくて、上り坂だと、男性は電車から降りて、トイレして帰つてこられるぐらいでした。群馬から足尾間の車道は、トンネルもなくて崖っぷちでした。だから嫁入り道具持つて、足尾に来るときは、よく落ちなかつたなつて思うぐらい、本当に怖かったです。足尾から日光に行くための細尾峠もクネクネした峠道で、日光に着くまでにみんな車酔いになりました。

大野書店は、創業何年かは詳しくはわかりませ

んが、私が小さい頃からあつたので、おそらく80年以上はやつたと思います。書店になる前は、葬儀に使う造花を売つたりしてました。そこから店舗を改装して、書店を始めました。

その頃の足尾は、桐生と比べても、電気、水道は通つてるし、テレビが入るのも早かつたし、進んでましたね。

朝は学生が通るから、娘をおんぶして、おばあちゃんや主人と3人で文房具を売つてました。子どもがたくさんいたから、忙しかったです。でも、まさか結婚して7年くらいで閉山になるとは、思いませんでした。そこからは人口もどんどん減つていつて、子どもも少なくなつちやうし、文房具や本なんかは、もうどこでも買えますからね。2013(平成25)年にお店を閉めました。

あの忙しかったときが、今ではうそみたいですよ。



右側に見えるのが昔の伊藤氷屋

大野書店から昭和通りをまっすぐに進むと、右側に^{注26} 庇^{ひさし}や屋根が赤い建物が見えてきます。商店マップでは、「伊藤氷屋」となっていますが、それより以前は遊女屋でした。そのことを示す、わかりやすい痕跡がこの建物にはあります。

この建物を正面から見てみる



(上) 鶴亀坂から見た伊藤氷屋
(中) 特徴的な持ち送り
(下) 屋根下の鶴の絵

と、屋根の下に鶴が描かれているのがわかります。これが、遊女屋であったことを示す痕跡です。鶴の絵が、屋根下の奥まった所に描かれているため、雨風にさらされることなく、今まで残っていたと考えられます。軒下には、普通の商店では、あまり付けないような、装飾を施した^{注27} 持ち送りも見られます。

ちなみに、伊藤氷屋の目の前の坂には、以前、亀甲模様が彫られていたため、屋根下の鶴と合わせて、「鶴亀坂」と呼ばれ、縁起の良い坂だったそうです。商店マップを見ると、伊藤氷屋の隣には、「松の湯」という銭湯がありました。松の湯は、現在でも建物が残っています。この建物にも、銭湯だったこと





現在の松の湯の建物

を示す特徴的な痕跡が残っています。松の湯は、現在、ガレージとして使われています。建物の正面に書かれている立川という名前は、松の湯の経営者の名前です。また、ガレージの中を見ると、今でも、銭湯絵が残されています。（※私有地のためガレージの中に入ることはできません。）



建物の中にある銭湯絵

で宣伝は十分だったそうです。トイレや洗い物等をする水場も共同。同じ地区の人たちと毎日顔を合わせるわけです。これが、

昔は、銭湯も町部と社宅で分かれていました。松の湯は、町部の人たちのための銭湯です。対して、一般の鉱員が住む社宅には、お風呂がなかったため、みんな各地区にあった共同浴場に行きました。そのため、会社で催し物をするときには、職場と共同浴場に掲示をすれば、それ



(上) 渡良瀬地区の共同浴場
(下) 上間藤地区の共同浴場

住民同士の結びつきの強さに繋がります。人情味あふれる付き合いは、こういった、生活環境によって生まれました。会社が造った共同浴場は、渡良瀬地区と上間藤地区に残っています。現在でも長屋に住んでいる方の中には、この共同浴場を利用して人もいます。



現在の安塚菓子店の店舗

松の湯の隣には、商店マップの昭和通りに載っているお店の中で、唯一、今でも営業を続けている安塚菓子店があります。名物は、あんこ玉です。あんこを丸めて、寒天で包み、それを2個くっつけたシンプルなお菓子



安塚菓子店の店内

ですが、足尾名物として長年愛されています。安塚菓子店では、あんこ玉だけでなく、足字銭最中等の他の和菓子も取り扱っています。和菓子によって、あんこに加える砂糖の種類と分量を微妙に変えるという徹底ぶりです。現在、4代目が後を継いでいますが、創業は明治時代にまで



足尾名物 あんこ玉

遡ります。足尾で100年以上、続いているお店のひとつです。安塚菓子店の長女として生まれ、お店の3代目の方が、昔のお店の様子や、鉾山町での女性の仕事について語ってくれました。その当時、年末の餅つきは、すべて臼と杵でついていたようで、その時に使っていた臼が、まだ、店舗の脇に残っています。

商人の娘と坑夫の奥さん

私は、1937(昭和12)年、安塚菓子店に生まれました。私で3代目になります。今は、息子が4代目として跡を継いでいます。安塚菓子店は、私のおばあさんの代からになるんですけど、その時は和菓子じゃなくて、駄菓子を売ってたみたいです。和菓子を始めたのは、私の父の代からです。

1962(昭和37)年頃は、子どものことをかまわってられないくらい忙しかったです。お節句の時は、1つの折箱に和菓子を20個ぐらい入れたのが、30も40もでした。

暮れの餅つきなんていうと、30年前くらいは機械化されてなかったから、臼と杵でついてました。その時は、ほとんど1時、2時起きで、仕込みは夜の10時まで。子どもが小さかったので、泣きだしたら2階へとんで行ってあやして、下りて作業しての繰り返し。夫が消防団に入っていて、火事があると私1人でやらないといけないので、10時ま

でつていうのは当たり前になりました。

隣が松の湯つていうお風呂屋さんだったので、そこのおばちゃんや、うちが遅くまで電気付けてると、「まだ大丈夫だから入りにきな」なんて言ってくれて、入れてもらったり。

坑夫の奥さんは、いっぱい背負いって言って、社宅が建つた場所の石垣積みは、坑夫の奥さんがやりました。石垣を積むために、^{注28}ざまかごに大きな石を入れて運んで。坑内で旦那さんが早くに亡くなったりすると、そういう仕事で子どもを育てたりしてたみたいです。坑夫の奥さんは、ずいぶん働いてました。そういう奥さんが、花見のときに和菓子を注文したりしてくれました。

子どもを育てあげるまで年中無休で働きましたから、自分の時間もないし、休みもありませんでした。でも息子が帰ってきて、初めて、火曜日の定休日を作りました。

「赤」の地名



安塚菓子店の横を流れる渋川

安塚菓子店の隣には、川が流れています。この川は「渋川」と言つて、川を境に松原地区と赤沢地区に分かれています。この渋川ですが、川の名前に由来があります。文字通り、渋味のする川です。なぜ渋いのかと言うと、タンパンという硫酸銅を含んだ

水だからです。銅を含んでいるということは、上流に銅が露出してある部分があるということとです。事実、江戸時代に赤沢、松原地区が足尾千軒と言われる程に栄えたときに、銅の採掘が行われたのは、渋川上流の箕子橋という場所でした。

そのことを示す地名がもうひとつあります。それが赤沢です。赤沢の沢は、渋川を指します。「赤」は最初の赤長屋のように、銅の露頭の影響で周囲の崖や川が赤く見えることから付けられたものです。「赤」の地名から、江戸時代の採掘の中心地がわかります。



1916(大正5)年の製錬所付近の地図

では、赤長屋はどの地区のことを指すのかというと、愛宕下地区です。愛宕下地区のすぐ近くには、明治時代、銅山が民営になつてから、銅の出荷量を飛躍的に伸ばす原動力となつた製錬所があります。ちなみに、その製錬所の真向かいの地区は、赤倉です。「赤」という地名は、足尾における2つの時代の銅生産の中心地を教えてください。

第4章 赤沢の花町



赤沢にあった成田山龍泉寺

片山古物店

山形靴店

池田屋・お茶屋

鶴月堂
和菓子屋

亀村旅館

掛水に至る

三徳商店

佐藤医院

松坂屋

新井表具店

松島建具店

ヒナ屋

焼き芋屋
みやぎ屋

通

近江屋

焼き芋屋

八百清

八百屋

阿部
パーマ屋

遊女屋

みます屋
遊女屋

あけぼの食堂

神山豆腐屋

北京軒
金田置屋

栄屋・遊女屋

江口写真店

呉服屋

飛駒屋・八百屋

オウチ
みすじ
芸者屋

八百屋

芸者屋

芸者屋

齋藤楼跡
・遊郭

福田牛乳屋

本田医院

成田山龍泉寺

大和屋料理店

金田座

福の湯
倉沢呉服店
森田雑貨屋

倉沢質屋
町長官舎

八田邸

島力肉店

沢田仕立屋

松原に至る

銀

座

広東軒
警察官舎

新炭間屋
小野崎音真館

保坂商店

八百佐・
料亭
金田床屋
村井時計店

清水タバコ屋

魚源食堂

カフェー

須藤畳店

本妙寺

安田歯科

勸工場

福井屋・
うどん屋

射的屋

カフェー
かじか

足尾小学校

西岡医院

平野屋遊郭

1940(昭和15)年
頃の商店マップ
(地域住民の記憶を基に作成)

玉野組
土木請負

足尾を彩った花町

はなまち

足尾銅山が全盛だった20世紀初頭、赤沢地区は花町と呼ばれ、賑わいを見せました。花町の様子を知ることには、足尾銅山の隆盛ぶりを知る手がかりになります。



橋を渡ると、赤沢地区。右側は安塚菓子店

松原方面から、渋川に架かった橋を渡ると、そこからは赤沢地区になります。赤沢地区は昔、前原と呼ばれ、芸者屋や^{注29}遊女屋が集まった町でした。

赤沢地区への橋を渡ると、右側には、足尾小学校があります。

1940(昭和15)年頃、小学校は町立と私立の2種類あり、足尾小学校は町立、今でも校舎が残る本山小学校は、銅山を経営する会社が造った私立の学校(1947(昭和22)年町立に移管)で、2005(平成17)年に閉校しました。鉾山町が町部と社宅で分かれていたように、小学校も例外ではなく、お互いの学校の児童が会うと、喧嘩や言



上間藤地区にある本山小学校

い争いが絶えなかつたそうです。この話は当時を生きた人たちの語り草になっています。

そんな、足尾小学校があった赤沢地区の中でも、当時、花町と呼ばれた場所の様子がわかる、お話を紹介します。

往時の花町の賑わい

私は明治43年、仙台で生まれ、小学校を卒業してから奉公にも行きましたが、父の仕事の関係であちこちと住所は変わり、昭和6年、足尾で結婚しました。

夫は、私たちが現在住んでいる赤沢で、北京軒というラーメン店をやってましたが、結婚を機にカフェーにしました。「カフェー」といつても、コーヒー店ではなく、酒場のことです。

いまのガソリンスタンドから幼稚園への通りと、それに交わる通りは当時の言葉でいえば、花町といわれ夕方から翌朝まで、それは賑やかな町でした。

お茶屋さんだけでも、新金田、あらい屋、福井屋、のんき屋、栃木屋、鹿沼屋、みます屋などがあり、芸者置屋もありました。

カフェーは「かじか」「みすじ」などがありましたが、北京軒の他は古河を退職した人がやって

いた店でしたが、賃金引き下げなど、不景気な話もあり、永くは続かず、短期間で店じまいしました。また写真屋さん、射的場、八百屋さん、魚屋さん、かん工場などたくさんのお店も並んでいました。

当時の景気のいい話といえば、勘定日などは、坑夫さんが自宅へ芸者をあげてのドンチャンさわぎなどは珍しくもなかったですよ。

私の店では、1日の売り上げが、50円をこえると、7人の従業員をつれて太田の呑龍さんへハイヤーで行き、帰りには、大間々の「ながめ」で遊んできたものでした。

私の店へは、酒飲みが目的で来る人、お茶屋さんへの行き・帰りに寄る人などさまざまでしたが、翌朝四時くらいまで客はありました。坑夫さんの多くは、それから仕事に出たのですよ。

町民がつづる足尾の百年第1部より抜粋

深夜でも煌々と明かりの灯った赤沢地区の賑わいは、常盤通りや昭和通りとは、また違ったものでした。

左の写真は、松原地区の安塚菓子店側から赤沢地区を見たときのものです。矢印が指す場所には、小野崎写真館の看板があります。小野崎写真館は、現在も同じ場所で営業を続けています



足尾共栄と書いてある建物の奥が小野崎写真館

が、1階は新関東観光株式会社足尾営業所としても営業しており、写真スタジオがあるのは2階です。

小野崎家と言えば、足尾ではとても有名な家で、銅山が閉山になる前は、足尾銅山御用達の写真屋でした。その中でも、小野崎一徳氏は、1883(明治16)年から1929(昭和4)年まで足尾銅山の製錬所、選鉱所の内部や、銅山で行われた行事等、銅山に関するありとあらゆる場所

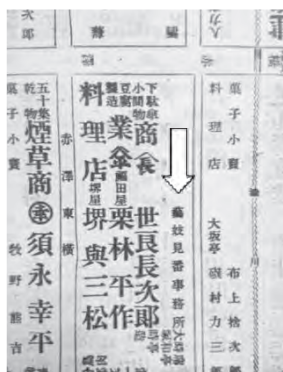


足尾町商工案内の一部(昭和10年頃発行)

や出来事を撮影しました。一徳氏が撮影した写真は、当時の足尾銅山の様子を物語る歴史的にも重要な資料となっています。この冊子でも使用した、鉱毒予防工事の写真は、一徳氏が撮影したものです。

1907(明治40)年には、小野崎写真館が建っている場所に、^{注30}芸妓見番事務所がありました。(栃木県営業便覧参考)この場所は花町への入口に当たるため、芸者の取り次ぎや送迎、^{注31}玉代の精算などを行う見番を置いたのだと考えられます。1907(明治40)年に足尾で撮影された見番の写真があります。190

7(明治40)年、足尾町には赤沢地区の芸妓見番事務所の他に、赤倉地区にも見番がありました。写真の見番は、商店マップで小野崎写真館の近くにある八百佐(やおさ)という3階建ての料亭の経営者や、安塚菓子店の目の前にある一丸(いちまる)旅館の経営者らが出資してできたものでした。出資者や写真の場所から見ても、おそらく赤沢地区にあった見番だと思わ



矢印の場所に藝妓見番事務所とある



「寿家」見番芸者衆 新義雄氏所有

れます。小野崎写真館の店主さんによると、この場所にお店を構えたとき、2階の一角には、他の部屋と比べて、一際広い部屋があり、そこは、芸者が踊りの稽古をするための稽古場として、使われていたそうです。内装は変わっているものの、現在、その部屋は写真スタジオとして使われています。

小野崎写真館から進むと、右側に八角形の特徴的な窓の建物があります。商店マップには「勸工場」とあります。工場と付いて



特徴的な八角形の窓

いますが、物を作る場所ではありません。勸工場とは、百貨店の先駆けのようなもので、複数のお店が一か所に集まって物を売る場所でした。しかし、百貨店が増えていくにつれて、勸工場は数を減らしていききました。足尾にある勸工場の建物は、そのまま残っています。



現在の勸工場の建物

呉服店と勸工場のはなし

商店マップ、

で通洞駅の前

の前の安

藤呉服店は足

尾の中でも大きなお店でした。1

935(昭和10)年頃の安藤呉服

店の写真を見ると、店頭にはシヨ

ーウィンドウがあるのがわかり

ます。今では、お店に当たり前に

あるショーウィンドウですが、江

戸時代や明治初期には、こういつ

た販売方式は革新的でした。その

時代、呉服店の多くは、「座売り」

と言って、お客さんを畳に上げ、

要望に応じて蔵から商品を取り

出してきて販売するという方法



足尾町商工案内の一部

を取っていました。その後、明治後期になって、商品をお店に並べて販売をする陳列販売方式をとる店が増え、扱う商品も呉服から服飾品、身の周りの品まで多岐にわたりました。こうして、呉服店は百貨店へと変貌していききました。その時に参考にされたのが、明治初期から陳列販売を行っていた勸工場です。その勸工場は、百貨店の高品質な商品に押されるように衰退していききました。しかし、陳列販売の元祖である勸工場は、「様々な商品を見て楽しむ」という、今までになかった買ひ物の仕方を提案したお店でした。

勸工場の前には、現在、足利銀行が建っています。この足利銀行は大通りに面した所に店舗があり、その後ろに駐車場が設けられています。写真で見ると、手前側が駐車場で、奥の白い建物が店舗です。前後に細長いつくりをしているのがわかります。この時点で気づく方もいるかも



手前から奥に細長い形をしている

しれませんが、足尾で細長い区画と云えば、映画館です。この場所には、「足尾東映末広映画劇場」が建っていました。これは、足尾で一番最後にできた映画館でした。

商店マップを見ると、勸工場の斜め前には、「魚源食堂」があります。今でも建物の一部が残っています。それが、写真の右側に見えるアーチの庇ひさしが付いた扉です。



(上) 現在の魚源食堂の建物
(下) 足尾町商工案内の一部

とても特徴的な扉ですが、

魚源食堂では、この扉は使わ

れておらず、足尾町商工案内の写真の一部で、従業員が整理している側に入りました。

では、アーチの庇が付いた扉は何なのかというと、地域の方によれば、魚源では、店舗の中にカフェーも併設されていたようです。アーチの庇が付いた、意匠を凝らした扉の奥は、そのカフェーに続いていました。

ここで、赤沢地区で生まれ育った方のお話しを紹介します。



アーチの庇が付いた扉

子どもの目に映った花町

私は、赤沢で生まれました。赤沢には、今のこども園がある所に成田山っていうお寺があって、隣には牛がたくさんいました。あとは、焼き芋屋さんがあったり、江口写真屋っていうけっこう古い写真屋もありましたね。そこには、現像するため幅広い地下室があったのを覚えてます。その地下室のすぐ下が八幡淵はちまんぶちって言って、渡良瀬川が流れてきて、赤沢にぶつかって渦ができてる所がありました。今は水量も減って、渦はできないですけど、昔はそこに、山から流れてきた木材がたまっていたので、それを取ろうとした人が、引き込まれることもありました。子どものときは、すごく怖かったのを覚えています。

銀座通りに面した所には、2軒の焼き芋屋さんがあったって、この2軒はしょっちゅう喧嘩してました。ちようど道をはさんで、隣り合っていましたからね。お客さんの取り合いでしょうけど、笑っちゃ

やいますよね。

あと、赤沢と言えば花町です。赤沢には、注 32だるま屋って呼ばれるお店が、多かったです。私はその頃はまだ子どもだったので、だるま屋って何だろうなーって思っていました。みます屋っていう女給さんを置いてるカフェーもありました。赤沢には、芸者屋とは違ってそういう所が多かったです。仕事が坑内なので、真つ暗なところで仕事して、どこも遊びいく所がないと、そういう所に流れていって、朝方帰ったりとか。子どもの目で見ると、町は賑やかだったし、そこに住んでるお姐さんたちも親切で、かわいがってもらいました。

赤沢には、お茶屋も多かったです。福井屋さんも1階でうどんやってたって、2階で女の人と泊まれるようになってたりとか。終戦後は、そういうお店はあつという間になくなりました。その後は、パチンコ屋が足尾の娯楽になりました。

花町と呼ばれていた頃は、お茶屋と言っても、茶葉を販売するお店だけでなく、色茶屋^{いろちや}と言って、お客さんに遊興・飲食をさせる店など、その営業形態は多岐にわたりました。商店マップに載っている、一見、花町とは関係なさそうなお店も、実は、芸者屋や、だるま屋を兼業していたということがあったようです。



昭和10年頃に作られたマッチ箱

この通りを
写した明治時代の
の写真があります。
その写真は
「商人宿通」と
いうタイトルで



十字路を左に行くと、開けた通りが見える



現在は住宅が建ち並んでいる



直進して、突き当りの丁字路を右に曲がる

魚源食堂からまっすぐに進み、突き当りの丁字路を右に曲がります。そこから少し進んだ先の

十字路で左を見ると、ちょうど目の前に杉の木が見える、開けた通りがあります。

1897(明治30)年頃に撮られたものです。
左の写真は、現在のその通りの様子です。山の稜線^{りょうせん}や通りの中心にある杉の木を見比べると、同じ場所だということがわかります。



商人宿通



足尾町の各所にある「まちなか写真館」

その写真は「まちなか写真館」として、商店マップで言うと、銀座通りに面した「みやぎ屋・焼き芋屋」の辺りに貼られています。かつて、商人であふれていた道を杉の木に向かって歩いて行くど、ちょうど杉の木のあたり

には、江口写真店が建っていました。聞き取りをした方のお話にも出てきましたが、江口写真店は、大きな地下室を備えていました。それは、下の砂利の空き地に行くときよくわかります。1つだけ付いている格子窓や、石垣とコンクリートで作られた外壁は、一見すると牢屋のようにも見えますが、ここが、江口写真店の暗室でした。

そして、その暗室の下が、かつては八幡淵はちまんぶちと呼ばれ、大渦を巻いていた場所です。

昔は、芸者が行き交い、夜の町という印象が強かった赤沢地区ですが、今では、成田山龍泉寺が

建っていた辺りには、足尾認定こども園が建設される等、町の様子は一変しています。「商人宿通」が撮影されたのが1897（明治30）年頃。それから現在までの、約120年間で、山の形が全く変わってないのとは対照的に、人の暮らしは丸つきり変わっていました。



江口写真店の暗室

鉾山町の三業

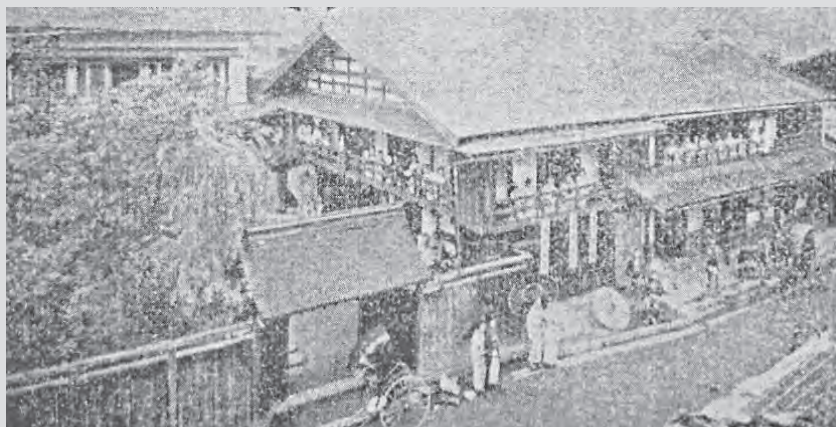
前述したように、赤沢地区には、芸者屋や遊女屋が数多くありました。しかし、それは赤沢地区に限ったことではなく、足尾の各地区には少なからず、そういったお店がありました。

一般的に、芸者がいる町には三業組合というものがありません。組合は料理屋・芸者屋・待合茶屋で組織されています。芸者遊びをするためには、芸者屋から待合茶屋に芸者を呼び、料理屋から料理を仕出ししてもらうという手順です。芸者屋は置屋とも言い、芸者の居住場所のことです。

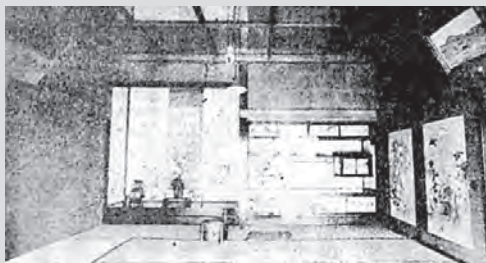
待合茶屋は貸席とも言い、芸者遊びをするための席を貸すお店のことです。

ただ、これまで、足尾の商店主の方が語ってくれているように、芸者遊びが出来るのは待合茶屋（または貸席）だけでなく、料理屋にも芸者を呼ぶことが出来ました。川本食堂や二ツ木などが、その例です。

1929(昭和4)年に発行された「全国花街めぐり」によると、「足尾には」待合は無く、料理屋も大きいのは旅館の兼業で、通洞駅前（泉屋、松原の一丸旅館、間藤の暢和館等を屈指の家として）とあります。つまり、足尾



泉屋旅館の写真。入口には人力車が見える



泉屋旅館の「鏡の間」

「泉屋は六十畳の大広間を有し、天井全部を鏡で張った『鏡の間』は足尾の一名物として、いかにも鉦山らしい気分を漂わせている。」上の写真がその「鏡の間」です。紙の劣化によって、一部、か

に待合茶屋はなく、料理屋と芸者屋で組織する二業組合だったということ。全国花街めぐりには続けてこうあります。

すれてしまっていますが、天井一面に鏡が張ってあるのがわかります。

他にも、足尾にあった料理屋を紹介します。商店マップで、赤沢の成田山龍泉寺の隣にあった太和屋料理店も、足尾随一の料理屋でした。1916(大正5)年、発行の足尾町商業案内便覧図を見ると、太和屋(料理)と書いてあります。下の写真を見ると、立派な庭園があり、そこには芸者も写っています。



足尾町商業案内便覧図の一部



太和屋料理店の庭園

栃木県上都賀郡統計書（一部省略）

第七五 縣稅諸營業ノ七		大正元年底	
町村名	藝妓 兼 茶屋 兼 酒樓	演劇 日數	演劇 日數
落合村	1	1	1
今市町	1	1	1
日光町	1	1	1
足尾町	1	1	1
計	4	4	4
總計	15	15	15
明治四十四年	15	15	15
明治四十三年	15	15	15
明治四十二年	15	15	15

また、1912(大正元年)年の栃

木県上都賀郡統計書を見ると、
藝妓、三等地の列に足尾町三十
六とあります。日光町、今市町と
比べて、最も多い数字です。

ちなみに、藝妓の下の演劇日
数を見ると、今市町の倍以上あ
ります。鹿沼町なども含めた上
都賀郡全体の演劇日数と比較す
ると、上都賀郡で行われた演劇
のおよそ半数以上は、足尾で公

演されたものでした。

泉屋旅館と太和屋料理店の2
つの料理屋や、統計表の数字を
見ると、20世紀初頭の鉾山町の
好景氣ぶりがよくわかります。

今では、その頃の建物のほと
んどはなくなっていますが、そ
の中で唯一残っているのが、商
店マップで通洞駅の近くにある
「鳥茂・芸者屋」です。建物は朽
ちていますが、芸者屋の近くに



現在の鳥茂・芸者屋の外観。建物の左側に
屋敷稲荷が祀られている

は、茶屋や花町で
よく見かける屋敷
稲荷が、今でも残
っています。

足尾にはかつて、芸者だけで
なく、多くの遊女屋や、遊郭等も
ありました。鉾山町にある花町
の繁栄は、そのまま足尾銅山の
全盛ぶりを物語っています。

注釈

1 鉦床が地表に露出している部分。(村上安正、足尾銅山史、随想社)

2 板状製品で、屋根葺き材料または内外壁、天井などに用いられる材料の一種。スレートは本来、粘板岩を薄板状に剥いだ石板のことであるが、今日では繊維で強化した板状または波板状に成形したセメント板もあわせてスレートと呼んでいる。(日本大百科全書、小学館)

3 1906 (明治39)年に鉦山で働く人々のためにつくられた、日本初の生活協同組合のお店で、「購買組合本山三養会」として発足。戦後、「足尾銅山生活協同組合三養会」に改められ、本部を渡良瀬地区に置き、最盛期には町内に9店舗を構え、食料品や雑貨などを販売。組合員数の減少などの理由により、2016(平成28)年に解散。(足尾銅山百選産業遺産保存活用の手引き、日光市)

4 足尾独特の鉦床、母石を交代してできた不規則な塊の鉦床。(足尾町閉町記念「足尾博物誌」 足尾町役場企画課)

5 江戸時代の足尾の繁栄ぶりを表す比喩表現。

例文…当時、足尾には吹床主12軒、山師44人、座数90床を数え、「足尾千軒」と言われるほど軒を並べ、大変な賑わいをみせていました。(足尾町閉町記念「足尾博物誌」足尾町役場企画課)

6 検番とも。その土地の料理屋・待合・芸者屋の業者が集まってつくっている三業組合の事務所の総称。芸妓の回転や料金に関する事務を処理する。(精選版 日本国語大辞典、小学館)

7 「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律」の略。キャバレー・ダンスホール・パチンコ店などの風俗営業と、ソーブランドなどの性風俗関連特殊営業につ

いて、規則や罰則などを定めた法律1948(昭和23)年
制定の風俗営業取締法を1984(昭和59)年に改正・改
称したもの。(デジタル大辞泉、小学館)

8 芝居などで、その日の興行が終わる。(デジタル大辞泉、小学
館)

9 一銭菓子を扱う、駄菓子屋のこと。一銭菓子とは、高級菓
子に対する下等菓子の意で、江戸時代には1個の単価がお
よそ一文であったところから、一文菓子とよばれた。明治
維新後は一文が一厘菓子になり、貨幣価値の変遷とともに
五厘から一銭菓子となった。(日本大百科全書、小学館)

10 土木・建築工事などの請負を職業とする人。(デジタル大辞
泉、小学館)

11 一杯背負いが訛った言葉。縦長の木箱に縄をつけた容器に

砂や砂利などを入れて、肩に背負って運搬する。女子の
主要な土木工事だった。(村上安正、足尾銅山史、随想社)

12 手だすけをする者。大工・土工・石工など。下まわりの
仕事をする者。(精選版 日本国語大辞典、小学館)

13 芸妓を抱えている家。また、その職業。芸妓屋。置屋。
(精選版 日本国語大辞典、小学館)

14 無声映画の上映の際、映画の進行につれてその説明をす
る人。(デジタル大辞泉、小学館)

15 映像に音声と同調させて再生する映画。発声映画。(精選
版 日本国語大辞典、小学館)

16 トーキョー(発声映画)以前の映画の総称。字幕や弁士が会
話や物語・事件の進行を補足した。無声映画。サイレン

ト。(精選版 日本国語大辞典、小学館)

17 浪曲ともいう。曲師の弾く三味線を伴奏として節をつけて

うたう部分と、「啖呵」と呼ばれる語りや対話の部分を、1
人で口演する唄入りの物語り芸。(日本大百科全書、小学館)

18 原価と売価の差額。もうけ。利ざや。(精選版 日本国語大辞

典、小学館)

19 歌・踊り・寸劇などを組み合わせた舞台芸能。華麗な装置・

衣装や群舞、スピーディーな場面転換などを特色とする娯
楽的な要素の強いショー形式のもの。(デジタル大辞泉、小学
館)

20 金偏(鉄鋼・鈹山・金属など)の産業が好景気なこと。朝鮮

戦争に伴う特需景気の際の流行語。金偏景気。(大辞林 第
三版、三省堂)

21 セメントあるいは石灰と砂とを混ぜて水で練ったもの。

壁の下地塗り・上塗りや、れんが・ブロックの目地塗り
などに用いる。(デジタル大辞泉、小学館)

22 家々で自家の所有を示すために、道具類・船・倉などに

つける符号。屋号・商標になったものもある。(デジタル
大辞泉、小学館)

23 尺貫法の重さの単位。1匁は1貫の1000分の1で、

約3・75グラム。(デジタル大辞泉、小学館)

24 遊女、芸者などを抱えておいて、揚げ屋、茶屋、呼び屋

などの注文に応じ、女をさしむけることを業とする家。
芸妓屋。(精選版 日本国語大辞典、小学館)

25 細尾峠は道幅が狭く、62か所に及ぶアピンカーブがあり、

特に冬季は通行に難渋をきたした。台風時には道路崩壊で

足尾が陸の孤島と化すこともしばしばであった。(足尾町郷土誌
編集委員会、足尾郷土誌)

26 建物の窓・出入り口・縁側などの上部い張り出す片流れの

小屋根。軒。(デジタル大辞泉、小学館)

27 壁や柱などに取り付けて、庇・梁・棚・床などの突出部分

を支える横材。装飾を兼ねたものが多い。(デジタル大辞泉、

小学館)

28 竹で編んだ比較的大きな籠で、背負い縄を肩に掛けて運搬

する用具。(村上安正、足尾銅山史、随想社、2006年、62

0 p)

29 遊女を抱えておいて、客に遊興させるのを業とする家。女

郎屋。(精選版 日本国語大辞典、小学館)

30 酒宴の間をとりもち、歌舞・音曲などによって酒興を添

えるのを業とする女。芸者。芸子。(精選版 日本国語大辞

典、小学館)

31 芸者や娼妓などを呼んで遊ぶための代金。(デジタル大辞

泉、小学館)

32 私娼を置いている宿。あいまいや。(デジタル大辞泉、小学

館)

銅山の町 足尾を歩く一足尾の産業遺産を訪ねて／村上安正／1998／わたらせ川協会
足尾ところどころ一その歴史と風土―藤田敏雄／1975／足尾町公民館
ごめんください、足尾のこと教えてください！ 地域おこし協力隊による聞き取り抜粋集
／日光市足尾地域おこし協力隊／2015／日光市役所足尾総合支所総務課
ごめんください、足尾のこと教えてください！その2 地域おこし協力隊による聞き取り
抜粋集 2015／日光市足尾地域おこし協力隊／2016／日光市役所足尾総合支所総務課
ビジュアル版 日本のフランス料理史 魯里人 第四巻／伊藤薫／2011／エービーシーツ
アーズ
建築デザインの解剖図鑑 まちで目にするカタチを読み解く／スタジオワーク／2017／
エクスナレッジ
小野崎一徳写真帖 足尾銅山／小野崎敏／2006／新樹社
足尾銅山史／村上安正／2006／随想舎
足尾町閉町記念「足尾博物誌」／足尾町役場企画課／2006／足尾町
足尾郷土誌／足尾町郷土誌編集委員会／1993／足尾町郷土誌編集委員会
足尾案内 銅山大観／王孫子／1908／栃木萬秀堂
名山足尾／塩野良作／1924／新田書店
足尾銅山／蓮沼叢雲／1903／公道書院
栃木県営業便覧／城北逸史／1907／全国営業便覧発行所
全国花街めぐり 上巻／松川二郎／1929／誠文堂(復刻版／渡辺豪／2016／カストリ出
版)
栃木県上都賀郡統計書第21回／栃木県上都賀郡役所庶務課／1916／栃木県上都賀郡役
所庶務課
続・値段の明治 大正 昭和風俗史／週刊朝日／1981／朝日新聞社
足尾銅山の社会史／太田貞祐／1992／ユーコン企画
足尾万華鏡一銅山町を彩った暮らしと文化／三浦佐久子／2004／随想舎
足尾銅山 小滝の里／太田貞祐／1994／ユーコン企画
足尾町商業案内便覧図／石井松治／1916／神山國吉(復刻版／足尾町商業案内便覧図復
刻委員会／1992／足尾町商業案内便覧図復刻委員会)
広報あしお 縮刷版 第1号／足尾町役場企画課／1990／足尾町役場企画課
広報あしお 縮刷版 第2号／足尾町役場企画課／2006／足尾町役場企画課
日本鉱業発達史 下巻／鉱山懇話会／1932／鉱山懇話会

参考文献

書名・論文名／著者・編者／発行年／出版社(発行所)・掲載雑誌

関塚家三代／関塚喜平／1973／東洋経済新報社 企画制作局事業出版部

喫茶店の時代／林哲夫／2002／編集工房ノア

鉱山の仲間とともに／上岡健司／2012／光陽出版社

足尾を語る会 第4号／工藤暁美／1994／足尾を語る会

足尾を語る会 第5号／会報編集委員会／1995／足尾を語る会

足尾を語る会 第6号／会報編集委員会／1996／足尾を語る会

目で見る足尾の百年〈第4集〉／川田勉／1989／足尾 AV 企画センター

目で見る足尾の百年〈第5集〉／川田勉／1989／足尾 AV 企画センター

目で見る足尾の百年〈第6集〉／川田勉／1989／足尾 AV 企画センター

町民がつづる足尾の百年 銅山に生きた人々の歴史／「明るい町」編集部／1994／光陽出版社

町民がつづる足尾の百年 第2部 銅山に生きた人々の歴史／「明るい町」編集部／2000／光陽出版社

「明るい町」新聞連載 町民がつづる足尾の百年 第3部 銅山に生きた人々の歴史／「明るい町」編集部／2002-2011／「明るい町」新聞社

足尾銅山労働運動史／村上安正／1958／三ツ屋政夫

全国遊郭案内／日本遊覧社／1930／日本遊覧社（復刻版／渡辺豪／2016／カストリ出版）

イラストで見る 昭和の消えた仕事図鑑／澤宮優・平野恵理子／2016／原書房

昭和の仕事／澤宮優／2010／弦書房

超雑学 読んだら話したくなる 日本の地名／浅井建爾／2010／日本実業出版社

全国女性街ガイド／渡辺寛／1955／季節風書店（復刻版／渡辺豪／2016／カストリ出版）

実態調査 全国赤線青線地区総覧／中村三郎／1954／三世社（復刻版／渡辺豪／2015／カストリ出版）

近代日本における百貨店の誕生／濱名伸／2016／関西学院経済学研究 47号 p1-p23

近代における消費の変容: 勤工場から百貨店へ／貞包英之／2012／山形大学紀要.人文科学 17巻 3号 p49-p69

足尾銅山百選—産業遺産保存活用の手引き—／齋藤修司・池野亮子・佐藤法子・福田富子・星野芳枝・目黒美津江／2017／日光市

おわりに

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。この本は、これまであまり語られることがなかった、足尾の鉱山町の商店の様子や文化に焦点をあてています。その多くは、地域住民の方々のお話を元に構成しているため、事実と違う箇所もあるかもしれませんが、この本では、足尾銅山で生きた一人ひとりの価値観を尊重しています。個人の語りに、歴史や事実のような客観性を担保することはできませんが、曖昧さがあるからこそ、その語りからは、話している方の人間味であったり、当時の町の空気感のようなものがにじみ出てきます。この本を読んで、少しでも、足尾に興味を持っていただければ幸いです。

足尾銅山は、労働運動史や産業発達史などの大きなテーマで捉えられることが多いですが、常に足尾銅山の歴史の根底にあるのは、そこで生きている人たちの日常であり生活です。だからこそ、今回は、鉱山町の商店という生活に密着したテーマで、聞き取りを行いました。また、この本で紹介している足尾の商店や建物は、2019(平成31)年に撮影したものです。時間の経過によつて、その時々状況と本の内容に違いが生じる場合がありますので、ご留意ください。

最後に、再三に渡る聞き取りに快く協力してくださった地域住民の方々、貴重な写真の使用を許可していただいた方々、日本大学社会学科の好井裕明教授をはじめ、誤りの多い原稿を丁寧に校正していただいた方々、1940(昭和15)年頃の商店マップの作成に、多大なるご尽力をいただいた13ページに掲載の「上岡」の次男坊けんちゃんこと、上岡健司様。この本の制作に、様々な形で協力していただいた方々に、この場を借りて、お礼申し上げます。本当にありがとうございます。

ごめんください、足尾のこと教えてください！その3

〈商店・映画館・芸者のこと〉

発行日…2019年2月21日

発行…日光市役所地域振興部足尾行政センター

編集…日光市足尾地域おこし協力隊

写真協力…小野崎一徳氏撮影写真

栃木県立文書館 新井常雄氏撮影写真

城崎正一郎氏 所蔵写真

商店マップ作成…上岡健司・中山貴仁

日光市役所地域振興部足尾行政センター

〒321-1514 栃木県日光市足尾町通洞8-2

TEL 0288-93-3115

※許可なく、本文中に掲載されている文章、写真の無断コピー及び転載を禁じます

